

九州文化財研究所創設 30 周年記念シンポジウム

# 関ヶ原合戦と九州の大名 どうする九州!?



---

## ご挨拶

本日は、弊社の創立30周年シンポジウムにご参加をいただき、ありがとうございます。

私どもは埋蔵文化財発掘調査をはじめ、城跡や寺院等の史跡調査や保存活用計画の策定など、貴重な地域の歴史を掘り起こし、護り育てる仕事を行って参りました。

30年という長い歲月、この仕事を続けて来られましたのは、ひとえに地元自治体の教育委員会など文化財関係者をはじめ、地元の歴史を愛する皆様方のご厚情、ご支援があったからこそと感謝しております。

弊社が創立以来目指して来たのは、業務の質、専門性の高さであり、歴史学や考古学を専攻した優秀なスタッフを揃えるとともに、最新鋭機材を駆使した業務の実施に努めて参りました。

今後も学術・技術の両面から業務の信頼と実績をさらに積み上げ、文化財を総合的・学際的にプロデュースできる企業として、熊本・九州に根付いた企業活動を続けて参ります。

また、歴史や文化財は国民共有の財産であり後世に渡って護っていくべきものという理念の基、講演会等のメセナ(芸術・文化の支援)活動にも力を入れていきたいと考えております。

今回のシンポジウムはその一環でもあり、テーマは「関ヶ原合戦」です。日本の歴史上の大きなターニングポイントになった合戦ですが、今回は九州の大名にフォーカスしております。超一流の研究者にご登壇いただき、新たな視点から研究成果をご披露いただけるかと存じます。盛秋の一日、歴史ファンの皆様にお楽しみいただければ幸いです。

令和5年10月29日

九州文化財研究所

代表取締役社長 真崎 伸一

## プロフィール



1955年、玉名市生まれ、玉名高校、航空大学校、早稲田大学法学部を卒業。

1981年、熊本県入庁、主に商工畑を進み、商工観光労働部長などを歴任。特に、半導体関連企業などの大型企業誘致を主導し成功させた。

2015年、熊本県信用保証協会長に就任。熊本地震・人吉水害・コロナ禍に際しては、混乱する現場をまとめ、大量の融資案件を陣頭指揮し震災後の経済復興に寄与した。

2020年9月、代表取締役社長に就任。

九州文化財研究所

社長 真崎 伸一

---

## 開 催 趣 旨

関ヶ原合戦は、最終的に軍記物や編纂史料による叙述の「東軍」「西軍」に二分割されて戦闘に突入した場面が強調されているため、未だに二項対立論的に理解されています。これは、九州における諸大名での戦闘にもいえることです。

「東軍」「西軍」という呼称は、当時のものではなく、元禄11年(1698)に書かれた『石田軍記』が初見で、関ヶ原合戦から約100年後に使われるようになった言葉なのです。この区分が一般化していったため、関ヶ原合戦は非常に単純な図式のように理解されています。しかし、これこそが関ヶ原合戦の本質をかえって曖昧なものにしているのです。

この戦いは、家康と石田三成のどちらかが勝って天下を取るといった単純なトピックではありません。その実は、秀吉が作り上げた武家官位秩序がある程度効力を持っている状況下で、豊臣政権を構成する大名間の争いがあり、徳川方と反徳川方の主導権争いが高じて戦いに及んだものといえます。

そこで今回は、「東軍」「西軍」という呼称について、例えば「家康方(軍)」「大坂方(軍)」というような言い方を提唱したいと思います。

徳川幕府はさまざまな機会を通じて、「徳川家康が関ヶ原合戦で石田三成を倒して征夷大將軍となり幕府を開いた」という物語に練り上げていった背景があるのは重要な視点でしょう。我々が関ヶ原合戦を「天下分け目」の戦いと認識しているのは、そのバイアスの影響を受けた結果でもあります。

九州における関ヶ原の戦いも同様で、「東軍」「西軍」と単純に分類されるものではありません。例えば、細川氏の味方として豊後国木付(杵築)城に加勢し、「東軍」として分類されている加藤清正についても、その意図は検討の余地が多くあります。史料を見ると、自らの勢力と権益拡大のために慎重に状勢を見極めていたと考えられます。

そこで、今回の記念シンポジウムでは、後の時代に「東軍」「西軍」と呼称された諸大名の行動原理を検証し、あわせて九州の諸将の動向も具体的に明らかにすることを目的として、内容を深めていきたいと考えています。

令和5年10月29日

九州文化財研究所

研究部長 花岡 興史

---

## 講演者兼パネラー紹介

---

九州大学大学院 教授

なかの ひとし  
中野 等 氏



福岡県生まれ。九州大学大学院中退、博士（文学）。柳川古文書館学芸員を経て現職。専門は中近世移行期で、戦国時代から江戸時代の前期を対象としており多くの著作を持つ。豊臣秀吉、黒田長政や立花宗茂などの研究成果を著している。

著作：『黒田孝高』（吉川弘文館、2022）、『太閤検地秀吉が目指した国のかたち』（中央公論新社、2019）、『石田三成伝』（吉川弘文館、2016）、『文禄・慶長の役（戦争の日本史）』（吉川弘文館、2008）、『立花宗茂』（吉川弘文館、2001）、『豊臣政権の対外侵略と太閤検地』（校倉書房、1996）ほか多数。

株式会社歴史と文化の研究所 代表取締役

わたなべ だいもん  
渡邊 大門 氏

1967年神奈川県生まれ。千葉県市川市在住。関西学院大学文学部史学科卒業。佛教大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。現在、株式会社歴史と文化の研究所代表取締役。

著作：『豊臣五奉行と家康関ヶ原合戦をめぐる権力闘争』（柏書房、2022）、『誤解だらけの徳川家康』（幻冬舎新書、2022）、『徳川家康合戦録戦下手か戦巧者か』（星海社新書、2022）、『関ヶ原合戦全史：1582-1615』（草思社、2021）、『関ヶ原合戦は「作り話」だったのか一次史料が語る天下分け目の真実』（PHP新書、2019）、『山陰・山陽の戦国史毛利・宇喜多氏の台頭と銀山の争奪』（ミネルヴァ書房2019）ほか多数。



---

## パネリスト紹介

---

別府大学 教授

しらみね じゅん  
白峰 旬 氏



三重県生まれ。上智大学大学院博士前期課程修了。名古屋大学にて博士（歴史学）の学位を所得。2003年より別府大学助教授、2009年より同大学教授。近世城郭の研究からはじまり、現在は関ヶ原合戦の研究において新たな指摘を多数行っている。

著作：『新解釈関ヶ原合戦の真実脚色された天下分け目の戦い』（宮帯出版社、2014）、『新「関ヶ原合戦」論一定説を履す史上最大の戦いの真実』（新人物往来社、2011）、『江戸大名のお引越し居城受け渡しの作法』（新人物往来社、2010）、『幕府権力と城郭統制一修築・監察の実態』（岩田書院、2006）ほか多数。

---

福岡大学 准教授 <sup>やまだ たかし</sup> 山田 貴司 氏

福岡市生まれ。福岡大学大学院博士課程満期退学。博士（文学）。  
熊本県立美術館学芸員を経て、現職。

著作：『ガラシャ つくられた「戦国のヒロイン」像（中世から近世へ）』（平凡社、2021）、『中世後期武家官位論』（戎光祥出版、2015）、『加藤清正』（戎光祥出版、2014）ほか多数。



---

## コーディネーター

---

九州文化財研究所 研究部長 <sup>はなおか おきふみ</sup> 花岡 興史



熊本市生まれ。九州大学大学院博士課程修了。博士（比較社会文化）。  
高校教員、熊本県立大学非常勤講師、国立熊本高専講師、経済産業省専門委員、九州大学比較社会文化研究院学術研究者などを歴任。

最近の研究成果は、豊臣秀吉文書の発見と、それにより断絶したと言われていた宗像大社（世界遺産）大宮司家の子孫の存在を証明した。

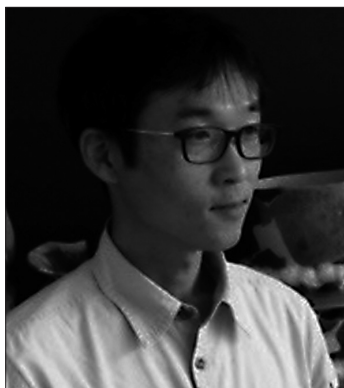
著作：『戦国時代人名辞典』（学研、2009年、共著）、『新甲佐町史』（2013年、共著）  
「江戸幕府の城郭政策にみる『一国一城令』」（『熊本史学』、2013年）、「天草・島原の乱にみる幕藩間の意思伝達について」（『九州大学研究紀要』、2013年）、『中近世の領主支配と民間社会』（創流出版、2014年、共著）、『山鹿灯笼伝統と革新』（山鹿灯笼振興会、2018年、編著）ほか多数。

---

## 司会

---

九州文化財研究所 調査研究室室長補佐 <sup>にしたに あきら</sup> 西谷 彰



福岡県生まれ。鹿児島大学卒業。大阪大学大学院から、英国ダラム大学博士課程修了。Ph.D.（文学博士）。

(Durham University (U.K.), Faculty of Social Science and Health, Department of Archaeology, Ph.D. in Archaeology)

著作：「弥生時代における土器の長距離移動」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』（大阪大学考古学研究室、2005年）、「英国における鉄器時代の時代・時期区分序説」『Archaeology From the South III 本田道輝先生退職記念論文集』（本田道輝先生退職記念事業会、2015年）ほか多数。

---

## 九州文化財研究所 創設 30 周年記念

# 「関ヶ原合戦と九州の大名 どうする九州!？」

---

■日時 2023 年 10 月 29 日（日曜日）13 時～16 時 30 分

■場所 くまもと県民交流館パレア 10 階パレアホール

■主催 九州文化財研究所

■後援  
熊本県  
熊本県教育委員会  
熊本県文化財保護協会  
熊本日日新聞社  
RKK（熊本放送）  
熊本史学会  
熊本歴史学研究会

■来賓  
田嶋 徹 氏（熊本県副知事）  
白石 伸一 氏（熊本県教育長）  
猪飼 隆明 氏（大阪大学名誉教授）  
佐藤 信 氏（東京大学名誉教授・くまもと文学・歴史館館長）  
吉丸 良治 氏（熊本県芸術文化振興会理事長）  
石元 光弘 氏（熊本県教育理事）  
井藤 和哉 氏（熊本県教育総務局長）  
舟津 紀昭 氏（熊本県教育庁文化課長）  
木原 徹 氏（熊本県文化企画・世界遺産推進課長）  
林田 直志 氏（永青文庫常務理事）  
高木 恭介 氏（熊本県文化財保護協会事務局長）  
梅林 誠爾 氏（熊本近代史研究会会長・熊本県立大学名誉教授）  
松永 政秋 氏（熊本歴史学研究会会長）  
吉永 明彦 氏（熊本県立図書館館長）  
松下 純一郎 氏（島田美術館館長）  
江藤 公俊 氏（熊本伝統工芸館長）  
坂口 圭太郎 氏（熊本県立装飾古墳館副館長）  
藤本 祐二 氏（株式会社 ARIAKE 代表取締役）

---

---

## 会次第

令和5年(2023)10月29日(日)

12時30分 受付開始

13時00分 開会

主催者挨拶

九州文化財研究所 代表取締役 社長 真崎 伸一

来賓挨拶

熊本県副知事 田嶋 徹 氏

13時15分

基調講演1

「関ヶ原」の戦いと九州

九州大学大学院 比較社会文化研究院 教授

中野 等 氏

基調講演2

美濃関ヶ原の戦いの真相と大名たちの行動原理

株式会社 歴史と文化の研究所 代表取締役

渡邊 大門 氏

14時55分 パネルディスカッション

関ヶ原の合戦と九州の大名 どうする九州!?

同上

中野 等 氏

同上

渡邊 大門 氏

別府大学 教授

白峰 旬 氏

福岡大学 准教授

山田 貴司 氏

コーディネーター

九州文化財研究所 研究部長

花岡 興史

16時30分 閉会

## 「関ヶ原」の戦いと九州

九州大学大学院 比較社会文化研究院 教授 中野 等

### はじめに

報告者に課せられたのは「関ヶ原」の戦いにおける九州大名の動向について報告することである。とはいえ、与えられた時間のなかで、出来ることも限られており、今回はキーパーソンのひとり黒田孝高（通称は官兵衛、官途は勘解由次官、当時は「如水軒圓清」と号す）の動きを中心にみていくこととする。それを踏まえ、ここでは報告の背景となる豊臣政権下の九州について、大名領国の変遷を中心として、概略的に述べることにする。

### 一 豊臣政権下の九州

#### 1 秀吉の九州国分け

天正十五年（一五八七）五月、島津家当主義久の降伏によって、豊臣秀吉による「九州平定」戦は終結する。これをうけて、九州の国分けが実施される。島津家当主島津義久には薩摩一国は充行われる。その後、いささかの曲折を経て、次弟の義弘には「新恩地」として大隅が、四弟家久には日向佐土原領、また義弘の嫡男久保には日向真幸院（諸県郡）が与えられる。このほか、薩摩出水の薩州家島津忠辰や日向庄内（都城）を拠点とする北郷時久（「一雲」と号す）・忠虎（讃岐守）にも大隅国内の本領に加えて日向の当知行を安堵されたようである。

九州平定戦の結果、豊後一国（および豊前の一部）は大友義統（秀吉への服属後、偏諱により「吉統」と改める）に与えられる。大友家はいち早く秀吉への接近をはかり、九州平定戦に際しては、日豊路を担当した豊臣秀長のもとで実戦に参加していた。こうした経緯もあって豊後を大友義統に許すこと、また日向国内に伊東祐兵を入れることなどは比較的早期に決まっていたようである。ただし、具体的な時期ははっきりとしない。

このほかについて秀吉は博多へ向かう帰路、順次国分け・国割りを進めていく。すなわち、肥後の相良頼房に球磨一郡を、球磨郡をのぞく肥後一国を佐々成政に与える。さらに、筑前箱崎の陣中に伺候してきた対馬の宗義智に対し「御恩地」として対馬一国を充行う。これを踏まえて、対馬宗氏には朝鮮国王の来日・参洛を実現することが求められることとなる。

また、日向の陣から凱旋した小早川隆景に筑前と北筑後三郡、東肥前の一郡半を与え、これを前提に筑後の各郡を立花宗茂（当時の実名は「統虎」）、高橋直次（当時の実名は「統増」）、筑紫広門、小早川秀包に与える。この前後に龍造寺政家をはじめとする肥前の諸将にも、領知充行が実施される。さらに、筑前箱崎での滞陣を終え、大坂へ凱旋する秀吉は豊前内で六郡を黒田孝高に、同二郡を森（毛利）吉成に与え、秋月種長・高橋元種に日向国内で知行を充行うことを決する。秋月種長は、島津義久に与して秀吉に抗った筑前の国衆秋月種実の継嗣である。既に家督は移譲されており、秀吉は種長に対し七月三日付で「日向国高鍋城」を与えるとした。高橋元種も秋月種実の実子であり、種長の実弟にあたる。高橋元種も秀吉に抗したが、実父・実兄に先立って秀吉に降っており、秋月種長と前後して臼杵郡の梶（延岡）城を許されたと推察される。

ただし、秋月家と高橋家の場合はそれぞれの居城こそ定められたものの、領国の範囲や規模は未だ具



体化されてはいない。とはいえ、九州国分けの大要は九州平定戦の直後、上記のようなかたちで定まる。こののち、佐々領となった肥後を中心に大規模な騒擾が勃発する。この結果、佐々成政は改易され、旧佐々領は益城郡宇土を城地とする小西行長と飽田郡の熊本の加藤清正に充行われる。こうした領知構造が大きく変動するのは、朝鮮出兵期のこととなる。

すなわち、天正二〇＝文禄元年（一五九二）三月から、「唐入り」すなわち明国征服を目指した大陸出兵が開始される。実際に朝鮮半島へ渡海したのは、主として西日本の諸大名となるが、小西行長や加藤清正らの例からも明らかなように、とりわけ九州大名は朝鮮半島の奥地まで侵攻することとなる。当初、戦局は日本勢が優勢であったが、明軍の正式参戦や朝鮮義兵の半島全土への拡大とその激化、朝鮮半島沿岸部の制海権の喪失などにより、日本側は次第に劣勢に立たされる。依然として日本の軍勢は都漢城を占領し、また朝鮮半島各地を実効支配していたものの、深刻な兵糧不足に悩まされることとなる。戦線が膠着し戦局が硬直することで、自国を蹂躪された朝鮮は別として、日本勢や明軍の間には厭戦気分が蔓延する。こうしたなか、明軍からの使節が日本側に差し向けられることとなる。

## 2 朝鮮出兵期の九州

文禄二年（一五九三）四月に、明国の使節が漢城に到着する。秀吉は、これを降伏の使節と看做し、軍勢の漢城撤退を認める。こうして征明を目指した「唐入り」が終了するが、当初の目的が達成されなかった責めをどこかに負わせる必要が生じる。こうして朝鮮出兵に際して「卑怯」な振る舞いがあったとして、五月朔日付で豊後の大友義統、肥前東松浦の波多親（実名は「信時」とも）、薩摩出水の島津忠辰が改易される。これらの改易によって、九州大名の領知にも大きな変容が生じることとなる。

肥前名護屋城は上記波多領内に位置したが、秀吉はこの旧波多領を寺沢正成（初名は「定政」のちに「広忠」「広高」と改める）に充行う。寺沢正成は秀吉を朝鮮に送る「太閤様御迎船」の糾合を行い、また朝鮮半島へおくる兵糧の集積などを担当していた。こうした実績によって、東松浦の旧波多領を引き継いだのであろう。後年の史料ではあるが、慶長三年の秀吉朱印状に「本知三万七千五百石」とあり、これが肥前国内の領知高であろう。

改易された島津忠辰の身柄は小西行長に預けられるが、ほどなく朝鮮半島で客死する。薩摩出水領は収公されるが、森山恒雄氏は寺沢正成が旧出水領とそれに北接する芦北郡水俣領の代官となったとする。こののち、文禄四年四月に旧出水領の一万石が対馬の宗義智に加増されるが、それ以外の事象については、必ずしも確定的ではない。

大友家が改易されたのちの豊後では、いわゆる「太閤検地」が実施され、国高四十二万石余が確定する。その後は政権の直轄地として郡単位の代官支配となるが、同じ年の十一月に中川秀成が直入郡竹田の岡城に入部する（領知高六万六千石）。秀成は秀吉の重臣中川清秀の次男で、朝鮮で討ち死にした兄秀政の跡を継いで播磨三木を領していたが、豊後に転封となった。秀政の死は物見に出たところを不意に討たれたというもので、いささか不名誉なものとされており、豊後への転封はその責めを負わされたものであろう。ちなみに、中川家には大友旧臣の田原紹忍や宗像鎮続らが与力として付けられる。豊後の他地域についての詳細はさだかではない。

ついで、文禄四年の秋頃に日田・玖珠両郡が毛利友重（実名は「高政」とも）に与えられる。その領知高は八万三千石とされるが、これには代官分を含んでいた可能性もある。このほか、時期は不明ながら慶長二年（一五九七）二月までに、毛利重政・竹中重利（「隆重」とも）・垣見（寛）一直（家純）・

早川長政（長敏）・熊谷直盛（直陳）・太田一吉らが、いずれも数万石の規模で入部する。

毛利重政は友重の実弟であり、尾張出身である父高次の代から秀吉に従っていた。竹中重利は秀吉の「軍師」される半兵衛重治とは従兄弟同志とされる。太田一吉は元々丹羽長秀・長重父子に仕えていたという。履歴不詳の者もあるが、いずれも尾張あるいは美濃あたりの出身であり、早くから秀吉に仕えていたとみてよい。さらに、これら豊後大名の大半（中川秀成以外）は、文禄の役の後半に朝鮮半島に渡り、「吏僚」的な活動をおこなっていた。また、垣見・早川・熊谷・太田はそれぞれ海士郡・大分郡・直入郡・大野郡の代官として直轄地支配の関わった経歴をもつ。このほか、毛利重政も代官として直轄地支配に関わった可能性が高い（『新訂 駒井日記』）。

さて、自治体史等でも記述に混乱があるものの、判明する限りの城地をそれぞれに比定しておくとして、垣見一直が国東郡の富来、熊谷直盛・竹中重利も同じ国東郡の安岐・高田、早川長政が大分郡の府内、太田一吉が海部郡の白杵三万五千石となる。毛利重政の城地については、残念ながら不詳である。

中川秀成以外の豊後大名は、慶長の役に際し「目付」として朝鮮半島に渡っており、豊後における大名取り立てはこれを見据えての措置であった可能性も高い。文禄の役では当初秀吉自身の朝鮮半島渡海が計画されていたが、慶長の役に関しては秀吉の渡海も想定されていない。そこで、秀吉は「目付」を朝鮮半島に派遣し、自身の「耳目」として朝鮮での戦況を具に報告することを課した。よく知られた「鼻請け取り証文」が、彼ら「目付」を充所とするのも、こうした職務の一環となる。「目付」としての職責から、彼らは前線の諸大名と軋轢を生じることも少なくなかった。

さて、毛利友重の実弟重政も「目付」として朝鮮半島に渡るが、慶長二年の五月初めに客死したようである。これをうけて福原長堯（「直成」・「直高」などとも）が豊後に入部し、朝鮮半島における「目付」の職も引き継ぐことになる。福原長堯は秀次事件の頃から、秀吉の信頼を得ていたようであるが、石田三成の女婿ないし妹婿と目されている。豊後における領知は速見郡あるいは大分郡あたりと推定される。これが正しいければ、城地は速見郡の杵築（「木付」とも表記）とみるのが自然であろう。さらに、この領知が毛利友重領を継承したものとの可能性も指摘できる。

慶長二年の年末から日本側の拠点蔚山城が明・朝鮮軍の猛攻にさらされる。半島の各地に展開していた日本勢が救援に駆けつけ、年明けに蔚山城はようやく窮地を脱する。ところが、その後の戦線を如何に立て直すかが大きな問題として浮上する。現地諸将の多くは日本側の拠点（いわゆる「倭城」）の抛棄を志向し、この計画は「目付」の福原長堯・垣見一直・熊谷直盛らによって秀吉に復命される。しかしながら、この報せに秀吉は激怒し、戦線縮小案に関与した諸将を厳しく糾弾することとなる。慶長三年五月のことである。こうした経緯によって、朝鮮半島の諸将・「目付」の間には大きな亀裂が生じ、それは次第に抜き難い対立構造となっていく。

さて、蔚山籠城戦との関連は定かではないものの、慶長三年正月十七日付で薩摩出水領と肥後水俣領が寺沢正成に充行われる。こののち、筑前名島の小早川秀秋が越前北庄に転封となり、旧小早川領は収公される。旧小早川領の代官となったのは、石田三成である。

## 二 九州における「関ヶ原」の戦い

福原長堯らの復命によって、蜂須賀家政・黒田長政らは「卑怯」者の譏りをうけ、「目付」としてこれに関わった早川長政・竹中重利・毛利友重らも激しく譴責される。ここでの指摘しておくべきは、この結果として「目付」をつとめた豊後大名の幾人かが改易処分となった可能性である。こののち、福原

長堯が府内に移っているようなので、早川長政が改易されてその旧領が福原長堯に加増された可能性は高い。残念ながら、その他の状況については不明である。

この年八月に秀吉が死去し、朝鮮半島からの撤兵が開始される。改年後の慶長四年正月、泗川合戦の軍功に対する行賞として、豊臣家大老が島津家に薩摩一国を一円として充行う。この間、薩摩国内には豊臣家の蔵入り（直轄）地のほか石田三成領・細川幽斎領などが設置されていた。既述の出水領も例外では無く、ここも鹿児島島津家領とされる。これをうけて、寺沢正成には当時豊臣家の蔵入り（直轄）地であった筑前国怡土郡の一部が与えられる。朝鮮半島からの撤兵が完了すると、二月には越前北庄から小早川秀秋が筑前名島に復領する。従前の名島小早川領と比べると東肥前が外れたようであり、筑前怡土郡の一部も寺沢正成領のままである。

ところが、閏三月にいわゆる七将の襲撃をうけた石田三成が、家康の勧告を容れて、佐和山に退隠する。これを契機にまた事態が動き出す。すなわち、石田三成の失脚によって、それまでの豊後の仕置きが覆され、諸々の処分も撤回される。蜂須賀家政・黒田長政の名誉回復がなされ、逆に福原長堯は虚偽の復命をおこなったとして処分される。こうした経緯で、早川長政が豊後府内に復帰し、旧福原領は細川忠興に与えられた。当時細川家は丹後を本領としており、忠興は名代として重臣の松井康之・有吉立行を杵築城に入れる。

こうして、「関ヶ原」合戦直前における九州の状況が確定する。動きの著しい豊後の状況のみ判明する限りで整理すると、速見郡杵築が丹後細川家の飛び地に設定され、国東郡の高田に竹中重利、安岐に熊谷直盛、富来に垣見一直、大分郡府内に早川長政、直入郡竹田に中川秀成、海部郡の白杵に太田一吉、玖珠・日田郡に毛利友重が配される。

秀吉没後の政権のあり様を巡って豊臣家家臣団の両陣営が分かれ、全国各地で対峙し対決するに至る。この所謂「関ヶ原」合戦において、九州の眼目となるのが「石垣原」の戦いである。石田三成らは大友義統に旧領を与えるとして、豊後細川領攻めを命じる。無勢の細川家中を率いる松井康之・有吉立行は、豊前中津の黒田孝高に救援を求めた。黒田孝高は徳川家康と連携し、その諒解のもとで軍を動かすが、そこに主従関係はない。むしろ、九州の合戦は黒田孝高とこれに師事する加藤清正が、一定の独自路線に基づいて行動したとみるべきであろう。

孝高は竹中重利とともに熊谷家の安岐城および垣見家の富来城を攻め、黒田・細川勢はついで「石垣原」で大友勢を破る。「関ヶ原」における本戦の確報は、九月末には届けられるものの、孝高らの軍事行動が止むことは無かった。豊後平定に道をつけたのち、黒田勢は豊前ついで筑後に転戦する。加藤清正も対大友戦に加わるべく軍勢を豊後方面に動かしていたが、孝高戦勝の報を得て軍勢を帰し、小西行長領の攻略に従う。九月下旬に清正は行長不在の宇土城を囲み、十月十五日頃に開城させる。ついで、清正は八代（麦島）城を下し、小西領平定を果たす。

西肥前の有馬・大村・五島・大村の諸氏は予て小西行長との関係が深く、石田方の求めに応じて出兵するが、長門の赤間関で談合をもつ。ここで大村喜前が事態の静観を主張したため、いずれも兵を退くこととなった（『長崎県史 藩政編』）。結果的に、有馬・大村らも肥後宇土城攻めに参加している。こうした西肥前諸大名の動きについては、寺沢正成の意向が反映していた可能性がある。秀吉が存生の頃、正成は石田三成や小西行長らと非常に近い関係にあった。たとえば、（文禄四年）五月二十四日付の島津忠恒充て書状で、三成は「小西撰津守・寺沢志摩守兩人ニ諸事可有御相談候、此兩人拙子別而無等閑候、御隔心有之間敷」と書き送っており、その信頼がうかがえる。ところが、秀吉の死後になると、大

老家康への接近が認められる。

これに先立って、「関ヶ原」本戦での石田方大敗の報をうけ、立花宗茂が大坂から戻り筑後柳川城に拠って抗戦の構えをみせていた。同じく肥前佐賀の龍造寺高房・鍋島勝茂も石田方に与して、伏見城攻めから伊勢方面に展開していたが、「関ヶ原」の敗報をうけて、国許にもどる。佐賀には勝茂の父直茂がいたが、これとともに立花宗茂を攻める。「関ヶ原」敗戦ののち、井伊直政（兵部少輔）・本多正信（佐渡守）・円光寺元倍らの教示を得たものという。同様に、加藤清正も鍋島直茂に対し、柳川を攻めることこそ「御忠節」であると勧めている。

十月二十日に龍造寺・鍋島勢は、柳川城の北に位置する三潯郡江上・八院で、立花勢と激突する。柳川では「江上・八院」の戦い、佐賀では「柳川合戦」と称する。その後、立花宗茂は柳川城に籠もるが、ここに龍造寺・鍋島勢はもとより、肥後制圧を終えた加藤清正、さらに黒田孝高の軍勢が迫る。程なく、柳川城に宗茂の身上を保証するという家康の許しが伝えられ、これをうけて宗茂も柳川を開城する。筑後を制圧した黒田孝高・加藤清正・鍋島直茂・同勝茂は、降伏した立花宗茂を先鋒とし、島津攻めを期して肥薩国境にまで兵を進める。十一月後半には島津側が恭順を示し、武力討伐が見送られることとなり、寄せ手は一定の守兵を残しつつ撤兵を開始する。

一方、日向では大半の大名が石田三成らに与して上方にあった。こうしたなか、黒田孝高が伊東祐兵に働きかけて自陣営に誘い、その証として北に隣接する高橋領を攻めさせる。九州平定戦に際し、黒田孝高と伊東祐兵はともに秀長の指揮下で協働しており、孝高と祐兵とは親しい関係にあったことが推察される。孝高の誘いに応じた飴肥の伊東勢は宮崎城を奪取し、さらに北上して佐土原に迫っている。この間、秋月種長や高橋元種・相良頼房らも石田方を裏切って、岐阜城を護る垣見一直・熊谷直盛らを謀殺している。

### 三 「関ヶ原」合戦後の九州

九月十五日の「関ヶ原」の本戦ののち、石田方の総帥毛利輝元は大坂城を退去し、十月には家康に対して恭順する。これにより、この度の合戦がさらに拡がって、長期化していく可能性もなくなる。こうした経緯は、家康方に与して戦った黒田孝高らの目論見を大きく崩していく。大友義統を退けるに際し、黒田孝高は当主長政に対して宇喜多秀家の跡を、さらに自身については「切り取った」領知を充行うという徳川家の内約を得ていた。ともに戦った加藤清正も恐らく同様であろう。実際、豊後を制圧した孝高は国東郡・玖珠郡の知行を、さらに豊前の森（毛利）領の知行を家臣に充行っている。

しかしながら、家康がこの内約を守ることはなかった。『義演准后日記』の十月十五日条には「諸大名知行分在之云々、福島左衛門大夫備後・安芸両国、輝元城ヒロ嶋（（広島））城拝領之云々」とある。合戦後の大名配置は、西国の場合、毛利家の処遇決定が大きな契機となった。毛利家を防長二国に減封するという決定は十月十日頃のこととされ、これをうけて福島正則に安芸広島が与えられる。また、宇喜多秀家の旧領は小早川秀秋が入り、黒田長政がその跡の筑前（寺沢領となっていた怡土郡の一部を除く）を充行われ、さらに細川忠興には豊前と豊後の一部が与えられることとなる。細川家の記録『綿考輯録』には、この間の事情が綴られている。それによると、長政は井伊直政との対談の中で「御恩賞国に於いては、一に伊予、二に筑前、三に豊前、望みに存じ候」と述べたという。長政は伊予を望んだが、そこは子細があつて応じられず、豊前については細川忠興が望んだため、長政には筑前が与えられる事となったという。

黒田家の旧領が大部分をしめる豊前を得た細川忠興は早速、玄蕃頭興元（忠興の次弟）と松井康之を九州に派遣し、この両人が豊前・豊後における城々請け取りを担う。「石垣原の戦い」でともに戦った黒田家と細川家だったが、一連の引き継ぎによって、両家の関係は非常に微妙なものとなる。いずれにしろ、先に述べた孝高と徳川家の内約は完全に破棄され、豊前の旧森（毛利）領や豊後国での知行充行状は「空手形」と帰す。また、防長二国に封じられた毛利輝元・秀元は黒田家との交誼を重んじるとの起請文を書いており、領国が隣接する諸大名の間に少なからぬ緊張関係を生じる。ここに家康の大名統制の巧みさをみることができよう。

以前から加藤清正は黒田孝高を敬畏していたようであるが、「関ヶ原」合戦の過程で、実質的に軍勢を指揮する孝高の軍事上・政治上の威勢は高まっていく。しかしながら、こうした傾向を家康が看過するわけもなく、孝高の声望がさらに高まることを嫌った側面は否定出来ない。さきに孝高が伊東祐兵を促して高橋領の宮崎城を奪取させるが、この戦後処理についても家康は孝高の意向を退けている。俗な言い方にはなるが、家康は悉く孝高の「顔を潰そう」としている。

さて、日向では、既述した伊東勢の宮崎城撤退問題などがあったものの、結果的に日向では佐土原の島津豊久（忠豊）領以外に領主交代もなかった。周知のように、豊久は関が原で討死を遂げるが、その後家康は垂水島津家の以久に佐土原領を与え、佐土原の島津領が復活することとなる。肥後では加藤清正が旧小西領を従えることが認められ、肥前でも大名領国のあり様に然程大きな変化は見られない。

最後になるが、九州における「関ヶ原」合戦の主戦場ともいえる豊後では、大名領国の構成も大きな変動を余儀なくされた。黒田孝高に抗った安岐の熊谷家・富来の垣見家さらに臼杵の太田家が改易され、先にも述べたように、国東郡と速見郡の一部は新たに豊前一国を与えられた細川忠興領に加えられる。残る速見郡の日出には北政所（秀吉正室・高台院）の甥にあたる木下延俊が入るが、延俊の正室は細川藤孝（「幽斎」と号す）の女子であり、忠興とは義兄弟の間柄となる。また、海部郡の臼杵には、美濃郡上八幡から稲葉貞通が入ってくる。貞通も「関ヶ原」合戦では途中から家康への与同に転じ、長束正家の近江水口城を攻めており、その論功行賞としての加増転封であった。日田の毛利友重は自身が三方として丹後田辺城攻めに加わるが、国許を預かる家臣は黒田勢に降伏しており、改易を免れて海部郡佐伯に移されている。玖珠・日田には来島康親（実名は「通親」、「長親」などとも）や小川光氏らが入り、また旧主の毛利家の預かり地がのこった。

来島通親は本来の苗字を「村上」と称し、村上水軍の流れをひく通総の子にあたる。伊予の風早郡に領知を有し、当初は「関ヶ原」合戦では毛利輝元に与して石田方として活動するが、姻戚にあたる福島正則の尽力によって許され、豊後玖珠郡の森に領知を与えられる。小川光氏の官途は「左馬助」と判明するので、小川祐忠の子祐滋と同一人物であろう。「関が原」本戦に際し、小川父子は小早川秀秋とともに寝返って味方を裏切った。府内の早川長政も改易され、ここには国東郡高田から竹中重利が加増をうけて移ってくる。こうした改易や転封が相次いでおこなわれるなか、竹田の中川家のみが異同も無かったが、秀成も当初は石田方に与して、家臣を丹後田辺城攻めに送り込み、また管下にあった田原紹忍や宗像鎮統が旧主大友義統に従って黒田勢と戦うなどの問題を抱えており、決して安閑としたなかで所領安堵を勝ち得た訳では無かった。

# 「美濃国関ヶ原の戦いの真相と大名たちの行動原理」

株式会社歴史と文化の研究所 代表取締役 渡邊 大門

## はじめに

慶長5年(1600)6月、徳川家康は上杉景勝を討伐するため、会津(福島県会津若松市)へ出陣した。翌月、行軍途中の家康は、上方で石田三成、毛利輝元が挙兵したことを知った。その後、家康は三成らを討つため、景勝の討伐を中止し、上方へと進路を変えた。こうして同年9月15日、家康は関ヶ原(岐阜県関ヶ原町)を合戦の地とし、三成が率いる西軍を打ち破った。

当時、多くの大名は、家康に与するべきか、三成・輝元に与するべきか、大いに悩んだ大名もいたはずである。今回は、東西の両軍に与した諸大名の行動原理について、考えることにしたい。

## 1 家康に従った大名たち

通説によると、慶長5年(1600)7月25日、家康は下野国小山(栃木県小山市)で小山評定を催し、諸大名から三成を討伐することの了解を得たうえで、上方へと軍勢を向かわせることになったという(小山評定が催されたか否かは、現在も論争が続いている)。家康に従った主な大名は、以下のとおりである。

### ◎家康に従った主な大名

森忠政、仙石秀久、石川康長、日根野吉明、真田昌幸及び子の信幸(信之)、信繁(幸村)、福島正則、池田輝政、細川忠興、黒田長政、浅野幸長、加藤嘉明、田中吉政、藤堂高虎、京極高知、生駒一正、堀尾忠氏、筒井定次、蜂須賀至鎮(家政の子)、山内一豊、中村一栄など。

→日根野吉明の妻は松平一生の娘で、真田信幸の妻は本多忠勝の娘だったので、ともに家康に与する可能性は高かった。

→福島正則、池田輝政、細川忠興、黒田長政、藤堂高虎、蜂須賀至鎮、加藤嘉明、浅野幸長は、明らかな家康与党である。

◇そもそも家康は会津に出陣する際、自身の与党と思しき面々を引き連れたのではないだろうか。そうになると、家康が説得するまでもなく、彼らに従った可能性があろう。真田氏や仙石氏が一族で分裂した理由は、いずれかが勝てば、家だけは残ると考えたと思われ、実際に残ったのである。

◇逆に言えば、三成や輝元ら西軍に心を寄せる諸将の多くは、上方に残った。このことが偶然なのかは、判然としない。後述するとおり、家康に心を寄せていた武将は、しぶしぶ西軍に従った可能性が高い。

## 2 脇坂安治・安元父子の行動原理

脇坂氏は西軍に与したように見えるが、複雑な事情を抱えていた。

【史料 1】(慶長 5 年) 8 月 1 日徳川家康書状 (「脇坂家文書」)

山岡道阿弥所へ之書状披見、懇意之趣祝着候、就上方忿劇、従路次被罷歸之由尤候、弥父子有相談、堅固之手置肝要候、近日令上洛之条、於拙子者可御心安候、猶城織部佑可申候条、令省略候、恐々謹言、

八月朔日 家康 (花押)

脇坂淡路守 (安元) 殿

→家康は書状の冒頭で懇意であることを祝着であるとし、三成の挙兵に際して、安元が上方に引き返したことをもっともなことであると評価した。つまり、もともと安治・安元父子は西軍ではなく、東軍に与する予定だった可能性が高い。

◇父の安治は大坂に留まっており、安元は関東の家康のもとに向かおうとしたが、三成によって東下を阻止され、やむなく西軍に従った。そこで、安元は山岡道阿弥のもとに書状を送り、一連の事情を説明したうえで、家康に志があることを伝えた。

家康はその志に感謝し、近く上洛する旨を伝えたのである。西軍に与した諸将のなかには、たまたま上方にいたため、西軍に従わざるを得ない者がいた。戦後、安治・安元父子が処罰されなかったのは、家康から事情が考慮されたからだろう。

ほかの西軍に与した諸将も同じことで、家康の理解があったので、改易処分は免れ者もいたと考えられる。

### 3 丹後田辺城の攻撃に加わった西軍諸将の行動原理

慶長 5 年 7 月 19 日、西軍に与した丹波・但馬・豊後の諸大名は、細川玄旨 (幽斎) が籠る田辺城を攻囲し、同年 9 月 6 日に開城させた。西軍の軍勢は約 1 万 5 千という一方で、田辺城に籠った軍勢は約 5 百と伝わっている (諸説あり)。田辺城がすぐに落ちなかったのは、西軍の中に玄旨から和歌の教えを授けられた弟子がおり、それゆえ城攻めに力が入らなかったといわれる。

→西軍の諸将に玄旨がいたのか否かは、詳しくわからない。

→関ヶ原合戦後、田辺城攻撃に加わった西軍の諸将のうち、家康から改易などの厳しい処分を受けたのは、小野木重次などわずかにすぎない。

→史料 1・2 を読む限り、玄旨と斎村 (赤松) 広秀との間の対立関係が読み取れないように思える。

【史料 2】(慶長 5 年) 7 月 19 日細川玄旨書状 (「大山崎町歴史資料館所蔵文書」)

猶々、彼同類之者、被相糺可然存候、已上

乍御報委細示預、麻植吉左衛門者林勝介被返付候、先以畏入候、上杉之者共慾所行、不及是非儀候、於其段懇目申談候ハ、能可相聞候、其時尚有様可被仰付候、万事、期其刻候、恐々謹言、

幽斎

七月十九日 玄旨 (花押)

齋村左兵衛尉殿

御返報

→玄旨は上杉景勝らの所行が許せないとしたうえで、追伸の箇所では上杉氏と同類の連中を糺すべきだと広秀に伝えた。

【史料3】(慶長5年) 8月6日齋村(赤松) 広秀書状写(「松井文庫所蔵文書」)

已上

好便候条申入候、今度不慮之仕合共、御心中察申候、とかく其様之儀、御上国候て尤存候、田辺之儀も于今其ま、御籠城にて候、其元之事ハ不入事候条、御上候而、諸事各へ被得御意候て可然儀候、此砌相応之御用之儀可蒙仰候、態も可申入儀候へ共、慥候事候間如此候、猶期貴面候条、不能子細候、恐々謹言、

齋左

八月六日 在判

松佐州様

人々御中

→書状の冒頭で「この度は不慮の事態が起こり、心中を察します」と松井氏に気遣いを見せ、松井氏に上国を勧めている。

◇丹波・但馬・豊後の諸大名は上方におり、西軍首脳から田辺城への出陣命令を受けた。仮に、彼らの志が東軍にあったとしても、命令を断ることはできなかった可能性がある。それゆえ西軍諸将は田辺城攻撃に力が入らず、家康もそのことを知っていたので、一部を除いて寛大な措置をしたと考えられる。

#### 4 小早川秀秋の行動原理

慶長5年(1600)7月18日、西軍の諸将は伏見城を攻撃した。その際、秀秋は伏見城を支援しようとしたが、城将の鳥居元忠から援軍を断られ、仕方なく西軍に味方としたという(『寛政重修諸家譜』)。秀秋の本心は不明であるが、その後も東軍に志がありながらも、泣く泣く西軍に従ったかのような書きぶりを行っている。

【史料4】慶長5年8月28日黒田長政・浅野幸長連署書状(「島根県立古代出雲歴史博物館所蔵文書」)

尚々、急キ御忠節尤二存候、以上、

先書二雖申入候、重而山道阿ミ所より兩人遣之候条、致啓上候、貴様何方い御座候共、此度御忠節肝要候、二三日中に内府公御着に候条、其以前に御分別此処候、政所様へ相つゝき御馳走不申候ては、不叶兩人に候間、如此候、早々返事示待候、委敷は口上に可得御意候、恐惶謹言、

浅野左京大夫

八月廿八日 幸長(花押)

黒田甲斐守

長政(花押)



筑前

中納言様

人々御中

→黒田長政・浅野幸長が秀秋に対し、東軍に与するよう説得した。この時点では、まだ秀秋の去就は決まっていなかったのか。北政所(秀吉の妻)を持ち出しているのは、秀秋が恩を受けていたからだろう。

【史料5】慶長5年9月14日井伊直政・本多忠勝連署起請文（『関原軍記大成』所収文書）

起請文前書之事

一对秀秋、聊以内府御如在有間敷事、  
一御兩人、別而被对内府御忠節之上者、以来内府御如在二被存間敷候事、  
一御忠節相究候者、於上方両国之墨附、秀秋江取候而可進候事、  
右三ヶ条、兩人請取申候、若偽於申者、悉茂、  
(神文省略)

慶長五年九月十四日 本多中務大輔

忠勝 血判

井伊兵部少輔

直政 血判

平岡石見守殿

稲葉佐渡守殿

→関ヶ原合戦開戦の前日、小早川氏は徳川氏と起請文を取り交わし和睦を結んだ。家康は秀秋が忠節に励んだならば、上方に2ヶ国を与える旨の知行宛行状を準備すると約束をしたのである。

【史料6】(慶長5年)9月17日彦坂元正・石河安通連署書状写（「堀文書」）

(前略) 然者去十四日赤坂二被成御着、十五日巳之刻、関ヶ原へ指懸被為及一戦、治部少輔、島津兵庫頭、小西、備前中納言四人ハ、十四日之夜五ツ時分二大柿外曲輪を焼払、関ヶ原へ一所二打寄申候つる、此地之衆井兵少又福嶋殿、為先手其外悉打続、敵切所を抱有所へ指懸とりむすひ候刻、筑前中納言殿、わき坂中書、小河土佐父子、此四人御味方被申、うらきりを被致候、則敵敗軍仕、追討二無際限、うちとり申候（後略）、

九月十七日 石川長門

彦坂小刑部

松平和泉守殿へ

→9月15日に関ヶ原合戦が開戦すると、秀秋だけでなく、脇坂氏、小河氏も東軍の味方となり、西軍を裏切った。これにより、東軍は西軍に勝利したのである。

◇秀秋が東軍に与するべきか、西軍に与するべきか、大いに悩んだのは事実であろう。とはいえ、西軍

の挙兵後は、自身も上方にいたので、即座に東軍に味方するわけにはいかなかった。同時に、東西両軍のいずれに味方するほうが得なのか、逡巡したと考えられる。史料4のように、東軍から説得を受けることもあった。最終的に秀秋は東軍が有利と判断し、合戦の前日には身を投じることを決意したのである。

◇関ヶ原合戦が始まると、家康に味方になると約束していた松尾山の小早川秀秋が、一向に西軍の陣営に攻め込まなかった。怒り心頭の家康は、配下の者に命じて、秀秋が陣を置く松尾山に鉄砲を撃たせた。家康から鉄砲を撃ちこまれた秀秋は気が動転し、慌てて松尾山を駆け下り、大谷吉継の陣営に雪崩を打って攻め入った。秀秋の裏切りにより西軍は崩れ、最終的に敗北した。

家康が松尾山に鉄砲を撃たせたのは「問鉄砲」といい、『黒田家譜』、『関原軍記大成』、『高山公実録』などの二次史料に書かれている。一次史料には明確な記述はないものの、このエピソードは脈々と受け継がれ、今や関ヶ原合戦に関する小説、テレビドラマなどではおなじみのシーンとなった。近年、白峰旬氏が「問鉄砲はなかった」ことを証明し、学界にも広く受け入れられつつある（『新解釈関ヶ原合戦の真実』宮尾母出版社）。

## 5 宮本武蔵は東軍と西軍のいずれに与したのか

宮本武蔵は、父の無二は美作国新免氏に仕えていたといわれている。これまで、新免氏は宇喜多秀家の配下にあっただので、武蔵は父の無二ともども宇喜多氏の西軍に属したと考えられてきた。

→「慶長七年諸役人知行割」という史料によると、新免氏や無二は、関ヶ原合戦後の時点で黒田家に仕えていたことが判明する。

- ①大御譜代——播磨時代以前の時期。
- ②古御譜代——豊前入部以前の時期（天正14年〈1586〉以前）。
- ③新参——筑前入部以後の時期（慶長5年〈1600〉以後）。

→「慶長年中士中寺社知行書附」という史料によると、新免氏は「新参」つまり黒田氏の筑前入部後に仕えたことが判明する。

一方、無二は同史料に「古御譜代」と書かれているので、豊前入部以前の時期に黒田家に仕えたことがわかる。したがって、関ヶ原合戦で無二が黒田家に従っていたのは明らかなので、東軍に属したとするのが自然である。

→『兵法大祖武州玄信公傳來』という二次史料によると、黒田官兵衛と大友吉統が戦った石垣原合戦において、武蔵が黒田方として出陣したことを確認できる。

同史料によると、武蔵は父に勘当されていたが、豊前中津の無二齋のもとを訪ね、勘当を解いてもらい、親子で出陣したという。

◇先述のとおり、武蔵は漠然と西軍に味方したように思われていたが、逆に東軍に与して戦った可能性

が高いように思える。武蔵は主君を持たず、合戦には牢人として大名に従って出陣した。関ヶ原合戦では東軍に属して勝利した姿よりも、西軍に与して負けたほうが受け入れられやすかったのではないか。

### おわりに

関ヶ原合戦前、西軍（三成、輝元ら）与党、東軍（家康）与党が存在していた。両者の対決は時間の問題だったのかもしれないが、家康が軍勢を率いて会津征討に向かったのは絶好のタイミングだった。家康の与党が多数、上方に残っていたならば、とても三成らは挙兵を決断できなかつただろう。逆に言えば、上方には西軍に心を寄せる大名が数多く残っていた。

小説などでは、家康が三成らの挙兵を予想していたが、あえて重臣の鳥居元忠を伏見城に残し、元忠も死を覚悟していたというが、そういうことはあり得ないだろう。挙兵を予想していれば、会津征討を取り止めるか、相応の軍勢を残したはずである。

したがって、挙兵時には自然に上方に三成らの与党が残り、家康に心を寄せる者は会津征討に従った、問題は小早川氏や脇坂氏のような面々であるが、彼らは最終的に西軍を裏切り、東軍に身を投じた。諸将は天下分け目の戦いにおいて、家を残すため決して負けるわけにはいかなかった。毛利氏でさえ、最後は三成を裏切って、家康と和睦したほどである。ドラマのような厚い友情などは、なかったのだろう。

以上

## 『日本王国記』における関ヶ原の戦いの記載と加藤清正の立ち位置について

別府大学 教授 白峰 旬

## はじめに

『日本王国記』（原題は『転訛してハボンとよばれている日本王国に関する報告』（大航海時代叢書）、岩波書店、1965年）の著者であるアビラ・ヒロンは、「イスパニアの貿易商人といわれている」（『国史大辞典』1巻、「アビラ・ヒロン」）人物であり、行動履歴としては「文禄三年（一五九四）フランシスコ会のアグスティン＝ロドリゲスらとともに七月十二日平戸に着いた。（中略）慶長三年（一五九八）には長崎に居住していたが、間もなく東南アジア諸地方へ赴いた。同十二年五月再度来日し、以後元和五年（一六一九）までは日本を離れなかったが、その後の消息は不明である。」（『国史大辞典』1巻、「アビラ・ヒロン」）とされている。

『日本王国記』の史的価値については、「宣教師以外の人の著書として珍しいものであり、内容も当時の政情を鮮やかに描写し、きわめて価値の高い書である」（『国史大辞典』1巻、「アビラ・ヒロン」）とされている。

▼外国史料（関ヶ原の戦いに関する記載あり）→記載内容に徳川政権に対する忖度はない

- ①イエズス会系史料…『十六・七世紀イエズス会日本報告集』など。宗教的バイアスがかかっている。非キリシタンの政治的重要人物への罵詈雑言を記載。
- ②フィリピン総督日本関係文書…スペインの国益に沿った内容。豊臣秀吉のフィリピン侵攻を警戒して日本国内の政権（豊臣政権）の情報を収集。
- ③それ以外…『日本王国記』（イスパニアの貿易商人の報告）

## 関ヶ原の戦いに関する記載

『日本王国記』における関ヶ原の戦いに関する記載は、以下のようになる。（下線引用者）

一五九八年八月四日、日本の第二代司教ドン・ルイス・デ・セルケイラが長崎港に着いた。彼は、学徳かね備えた人物であった。a 同じ年の八月十二日、太閤様 Thaycosama 死去の情報がとどいたが、彼はわれわれのいわば父だったから、われわれは皆心から悲しんだ。パードレたちを迫害し、その財産を没収したことを除けば、われわれには何の害も加えなかった。それどころか、われわれをかばってくれて、誰もわれわれに侮辱を加えることを許さず、そのようなことをした日本人を厳罰に処したのであった。

b 太閤は王子の後見人として家康という名の殿に自分の息子〔秀頼〕を託した。息子は家康の孫娘と結婚していたが、c 家康は次第に謀反を企てていった。d 太閤の崇拜者たちはそれを見て、大坂にいる秀頼に天下 Tenca をとらせようと決意し、薩摩の殿〔島津義弘〕および有馬殿〔晴信〕、太閤様死去の折、朝鮮にいた他の人々と共に朝鮮から帰国していたドン・アグスティン〔小西行長〕、肥後の領主<sup>セニョール</sup>の主計殿 Cancuyendono〔加藤清正〕、治部少輔〔石田三成〕らが同盟を結び家康に対して陰謀を企てた。 e たまたま内府 Dayfu とよばれていた家康は謀反を起こした自分の領地を平定しに出かけてその地にいたので、f 彼らはこの機会に家康をして再び天下 Thenca をとらせまいと決心した。そこで都の統治のために残して行った家康の手の者を殺し、蜂起したのである。g 家康はそれを知ると強力な軍を率いて太閤とその息子の名のもとに集まった同盟者たちを討とうと都を襲った。h これらの殿たちは多くの兵員

を擁していたが、頭株が多すぎて統一がとれなかった。i 有馬殿の裏切りのためといわれているが、彼らは内府に滅ぼされた。薩摩の殿は家康をうまく出しぬき兵を率いて退却し、自分の領地に引きあげた。有馬殿は味方を裏切ったので許された。肥後の殿は和を結んだ。ドン・アグスティンは捕えられて殺され、治部少輔は頭を下にしてはりつけにされた。j 暴君はこれを最後に全国を平定し、もはや戦うこともなく天下を一手におさめたのである。k 秀頼はまだ大坂城にいたが、のちに述べるように内府を伏見に訪れた六一一年まで一步も外に出なかった。全国は平和になったが、これ以来この王国ではすべてが次第に変わって来て、l われわれにとっては万事不都合になり始めた。国王〔家康〕は暴君で、商売人で、しかも強欲である。m 彼の治世は九九年から始まったといえよう。n もっともさきに述べた蜂起あるいは陰謀は一六〇〇年に起こったことであるが。

※〔〕は訳者による補足を示す。

下線 a …豊臣秀吉に対する好意的評価

下線 b …豊臣秀頼は「王子」。家康はあくまで秀頼の後見人。秀頼が「家康の孫娘」である千姫と結婚したのは慶長 8 年 7 月であるから、「結婚していた」とするこの記載は正しくない。

下線 c …家康の豊臣政権に対する「謀反」という見方。家康の謀反については、126 頁にも出ている。関ヶ原の戦いの根本的原因を考えるうえで重要である。徳川政権に対する忖度そんたくが必要ない見方だからであろう。国内の関係史料に同様の記載（「謀反」）はない。徳川政権に対する忖度そんたくが原因か？

下線 d …家康の豊臣政権に対する「謀反」に対して、石田三成らが同盟を結んで、家康に対して「陰謀」を企てた。石田三成らは「太閤の崇拝者たち」であり、家康の「謀反」に対して、秀頼に天下をとらせることが目的であった。このことは家康の「謀反」が成功すると、秀頼が天下をとれないことを意味していた。有馬殿は誤認であり、「羽柴殿」（羽柴と有馬は発音が似ているので）＝小早川秀秋のことであろう。加藤清正が明確に石田三成方（つまり、反家康方）としている点は注目される。加藤清正の立ち位置について今後再検討が必要。通説では、加藤清正は家康方と理解されている。

下線 e …上杉討伐を指す（上方を留守にしていたことを指す）。

下線 f …反家康方は伏見城を預かっていた家康方軍勢（下線 f の「都の統治のために残して行った家康の手の者」）を攻撃して軍事的に「蜂起」した。

下線 g …「太閤とその息子の名のもとに集まった同盟者たち」という表現は注目される（下線 d における「太閤の崇拝者たち」という記載と同様）。家康の軍を「強力な軍」としているのは注目される。家康が「都を襲った」としているのは誤認である。

下線 h …反家康グループは多くの兵力数を有していたが、「頭株」（＝中心人物）が多すぎて統一がとれなかった、としている。豊臣政権内部のことなのか、前線のことなのか要検討。

下線 i …「薩摩の殿」（島津義弘）に関する記載（＝退却に成功して領国に帰った）は正しい。加藤清正が家康と（戦後に）和を結んだ、という記載は注目される。家康と和を結んだ、ということは、それまでは家康と敵対していたことになる。やはり、上述したように、加藤清正の立ち位置については今後再検討が必要。

下線 j …家康のことを「暴君」と記載しているのは注目される。「暴君」は下線 l にも出てくる。

下線 k …伏見ではなく、二条城での会見である。

下線 l…家康に対する評価は、下線 a の秀吉に対する好意的評価とは正反対である。家康のことを「国王」としている点は注目される。これは下線 j の結果、家康は日本の「国王」になった、という意味であろう。

下線 m…家康の治世は 1599 年から始まった、ということが具体的に何を指すのか要検討。

下線 n…反家康グループによる「蜂起」と「陰謀」は、1600 年（慶長 5）におこった、としている。

## まとめ

- ▼下線 c と下線 d の記載からは、家康の（豊臣政権に対する）「謀反」VS 石田三成など反家康グループによる（家康に対する）「陰謀」という構図がわかり、この構図は両者の明確な対立軸として注目される。対立軸としては非常にわかりやすい。
- ▼反家康の首謀者として毛利輝元の名前がない点は注目できる。
- ▼「太閤の崇拜者たち」という表現→反家康グループが結集した思想的背景をうまく表現している。「太閤とその息子の名のもとに集まった同盟者たち」も同様。具体的には、島津義弘、有馬晴信（小早川秀秋カ）、小西行長、加藤清正、石田三成。
- ▼関ヶ原の戦いに至る政治的経過の中で、「謀反」を企てた家康には政治的正統性など全くない（関ヶ原の戦いの根本的原因を家康自らがつくった）→『日本王国記』の記載の大きな意義
- ▼家康の「謀反」が、関ヶ原の戦いに至る政治的経過の発端（根本的原因）になった。  
→ただし、こうした政争は国政の最高レベルの権力闘争であるので、筆者（白峰）として、家康のこのような政治姿勢・政治行動を非難しているわけではない。
- ▼加藤清正是「太閤の崇拜者たち」、「太閤とその息子の名のもとに集まった同盟者たち」のグループに入っている中心人物の一人、というのは当然と言えば当然。→通説との違い。加藤清正の立ち位置について再検討が必要。

## 家康の「謀反」をどう考えるか？

- ▼家康の「謀反」をどう考えるか？→家康の強引な権力篡奪だった、という事実を徳川史観はうまく隠蔽している。例えば、『寛政重修諸家譜』では、どの大名家の家譜でも、ご先祖の大名家当主が関ヶ原の戦いの時は家康の味方でした的な書き方（家康と敵対した大名の自己弁護）をしている。そうすると、関ヶ原の戦いで家康はだれと戦ったのか、というおかしな話になる。これは江戸時代後期になって、関ヶ原の戦い当時の状況について、歴史イメージの操作をしている（家康を悪者にしない。石田三成一人を悪役に仕立て上げる。→神君・家康VS 悪人・石田三成というイメージ作り）。こうしたイメージは現代まで影響（関ヶ原の戦いは家康にとっての正しい戦争だった）している。
- ▼マクロに見ると、武家政権は本来、私的権力なので武力による権力闘争（政権に対する権力篡奪）は宿命のようなもの。武力（軍事力）を国家が掌握していた律令国家の時代や、明治政府以後の近代国家ではない封建制の時代は、国家の軍隊（律令国家の軍隊や近代国家の軍隊）が存在しない、特殊な時代だった（官僚が国家を動かしていない時代）。私的権力（極論すれば、武士というのはあくまで私的な存在であって、公的な存在ではない）が武力を持った時代なので、武家政権における公儀ぎたいきというのは擬態的なものであり、本来の公儀（＝国体＝国家体制）ではない。
- ▼よって、家康の「謀反」も当然、権力闘争（政権の篡奪）の過程ではおこりうること。善悪の問題ではない。

## 九州の関ヶ原合戦、どうしていたんだ清正！？

福岡大学 准教授 山田 貴司

### 1. 清正研究の現状と課題

#### (1) 清正研究の現状

- ・熊本城築城400年(2007年)、清正没後450年(2012年)といったメモリアルイヤーを迎えたこともあり、この20年間に大きく進展した加藤清正論。
- 清正公信仰により生まれた虚説、肥大化したイメージを払拭した実像が描かれるように。
- ⇒そうして明らかになってきた清正の実像を、近年進捗をみせている中近世移行期の政治史研究や豊臣政権論にフィードバックし、彼の政治的位置や役割を再検討する段階に。

#### (2) 関ヶ原合戦における清正の動向に関する研究と、それへの疑問

- ・2012年に「関ヶ原合戦前後における加藤清正の動向」を発表〔山田14aとして再録〕。
- 九州に留まった清正は黒田如水と連携しつつ、徳川家康と連絡をとり、その指示に従い、家康が尾張に到達した後、9月15日以降に肥後・筑後で西軍諸将の拠点を攻撃。
- ⇒ただし、①清正は最初から東軍に与するつもりだったのか？②どういった思惑で諸城を攻略していたのか？という点については、別の見解や疑問も提示されてきた。
- ☆以上を踏まえ、山田は関ヶ原合戦前後における清正の動向と、それへの疑問について再検討。

### 2. なぜ清正は九州に留まったのか？関ヶ原合戦以前にみられた清正と家康の関係

#### (1) 清正と家康の接近

- ・慶長3年(1598)8月の秀吉の死後、豊臣政権では様々な対立軸が交差しつつ権力闘争。
- 前田利家が死去すると、翌年閏3月に清正たち七人の武将は石田三成を襲撃。七将襲撃事件。
- ⇒家康が仲介、三成は失脚。家康と清正は接近、家康養女が清正正室に〔水野・福田07〕。

#### (2) いったん冷え込んだ両者の関係

- ・ところが、慶長4年(1599)3月に起きた庄内の乱への対応をめぐり、両者は微妙な関係に。
- ※庄内の乱は、島津忠恒が重臣伊集院忠棟を誅伐したことがきっかけとなり、忠棟の子息忠真が日向都城で反旗を翻したという事件。
- 豊臣政権の主導権を握っていた家康は、諸大名に動員を示唆しつつ穏便な解決策を探る。
- ⇒ところが、なぜか清正は都城で戦う忠真を支援。家康から上洛禁止令を出される事態に。

#### (3) 家康の上杉討伐をめぐる清正とのやりとり

- ・慶長5年2月に清正は大坂を訪れており、上洛禁止令はいちおう解除されていた模様。
- ただ、家康が上杉討伐を計画すると、清正は反対。遠征への参加は望むも、在国することに。

〔史料1〕（慶長5年）7月21日付黒田如水宛加藤清正書状「田中文書」福岡市博物館所蔵  
 去十九日之御状、今日巳刻二令拜見候、上かたの様子被仰聞、得其意候、如此二候ハんと依見及申、内府公〔徳川家康〕へも今度推算なから達而申上候へ共、無御同心、結句御腹立にて、拙者式へハ御気色も五三日ほどあしく被成候間、か様に各覚悟之違候所、被成御分別間敷事二あらず候へ共、各存分被申、天下之乱候儀、不苦と被思召、右之御存分二も及と令察にて、不及是非、御異見たて度如申候、（○以下略）

### 3. 7月17日に西軍挙兵。清正は最初から家康に与するつもりだったのか？

#### (1) 「最初から東軍に与するつもりだった」とみなす山田の見解に対する疑問の声（光成 19）

- a 〔史料1〕に、西軍の中枢に入っていた安国寺恵瓊の「存分」を聞きたい、と記されている。
  - b 8月12日付清正宛家康書状（「古今消息集」）は写しかなく、原本が確認されていない。
  - c 9月7日付清正書状、同11日付清正書状は家康側近宛にもかかわらず「黒田家文書」に伝来しており、しかも冒頭に「跡書」と記され、不可解である。
  - d 清正の出陣準備は9月13日にはじまるが、そうなったのは「東軍の荷担を装いつつ、自らの權益拡大のためにはどのように行動すべきか、慎重に情勢を見極めていた」ためである。
- b・cを根拠に「清正が当初から東軍に荷担していたと結論づけることにはためらいを覚える」。

#### (2) 山田の反論

- a ← 7月21日段階で安国寺恵瓊が西軍中枢いたと清正が知っていたことは証明されてない。
- b ← 8月12日付清正宛家康書状にみえる肥後・筑後両国付与の約束については、他の清正書状にも同様の証言がある。そうすると、写とはいえ内容が否定されるようなものではない。

〔史料2〕（慶長5年）10月13日付加藤与左衛門尉宛加藤清正書状「阿蘇品氏所蔵文書」  
追而其元兵糧之儀申付候、則善介ものを指遣候、下々迄兵糧丈夫二可指置候、又申候、肥後・筑後一式二我々令拜領候間、相良〔頼房〕事、置候ハんも、置間敷も、はからひにて候由、求磨へ可申遣候、已上、  
 薩摩もの少々討果候由候て、首六ツ指越候、可然申付やうに候、  
 従求磨之使僧并書状加披見候、いかやうに書状指越、ことハリ候へ共、近年之意趣といひ、今度之働不及是非候条、内府公〔徳川家康〕被成御免候共、ことハリを可申上候条、少も味方之さばき無用候、此旨急度可申遣候、（○前後略）

- c ← 「跡書」とは、発給文書の控を意味する言葉であったことが判明した〔山田 22〕。そして、家康側近宛清正書状が「黒田家文書」に伝来しているのは、清正が情報共有のために控を如水に送付していたためである。したがって、これらもまた内容を疑う必要はない。
- d ← 9月11日付家康側近宛清正書状において、清正は「口上ニ、尾州表迄不被出御馬已前ニ、卒爾之働仕間敷之旨、被仰下ニ付而、今迄相かゝへ申候」と述べている。9月7日付同書状では、家康がどこまで西下してきたのか問い合わせてもいる。つまり、9月半ばまで軍勢を動かさなかったのは、家康の指示に従い、彼の尾張到着の報を待っていたためである（実際には、家康の尾張入国は9月10日）。



### (3) 早くから家康とコンタクトし、東軍に与するつもりだったのか？

- ・ 8月12日付清正宛家康書状写には「雖今度上方榊楯候、御方之儀別条無之由、祝着之至ニ候」とみえ、西軍拳兵から間もない時期に家康へ「御方之儀」を申し入れていたことが判明。
  - ・ 7月27日付松井康之等宛清正書状には「か様ニ可有之と存、先書ニも申候き」とあり、これ以前から豊後木付の細川家臣松井・有吉両氏と連絡をとっていたことが判明。
  - ・ 8月15日付清正宛中川秀成起請文写には、家康に対して表裏なく、奉行衆や毛利輝元へは「身上」を頼むとの返事はしていない、という清正への誓言が記載される。
- 清正は早い時期から家康とコンタクト。西軍から目の敵とされた細川家支援に意欲をみせているように、東軍与同が方針。しかも、そのことは8月半ばまでに周辺大名も把握していた。

## 4. 4つの段階に区切られる清正の軍事行動。その思惑は？

### (1) 豊後木付城の救援

- ・ 細川家の飛び地であった豊後木付城には、細川家臣松井康之・有吉立行が駐留。
- 拳兵直後から西軍は細川忠興を目の敵としており、ここには西軍から大友義統が派遣される。
- ⇒7月後半以降、連絡をとりあっていた清正は、出陣後まず細川勢の救援に向かう。

### (2) 小西領への侵攻

- ・ 黒田勢の木付救援により大友勢が敗戦すると、清正は踵を返して豊後玖珠から小西領へ。
- 小西行長が不在の宇土城や八代城を攻撃。宇土城は10月半ばに、八代城は17日には開城。

### (3) 筑後柳川城の包囲・開城

- ・ 宇土城を攻略した清正、すぐ北上して筑後柳川城へ。※筑紫氏はこの頃に清正に従属。
- 西軍に与した立花宗茂は、近江大津城攻めに参加。西軍の敗戦後、10月2日までに帰国。
- 10月20日、立花勢は肥前鍋島勢と江上八院で合戦。その翌日には、加藤勢が柳川へ。
- ⇒「御赦免」を報じる使者の下向もあり、10月24日に宗茂降伏。筑後は黒田・加藤の手に。

### (4) 島津領に向けて南進

- ・ 柳川城を開城させた後、清正は黒田・立花勢とともに薩摩へ。11月18日までに水俣着。
- しかし、家康は薩摩進軍に待ったをかけ、和睦交渉。その結果、11月後半には停戦・帰国。
- ⇒清正は停戦に反対していたものの、これにより「九州の関ヶ原」はいちおう終結することに。
- ※なお、この間に島津勢は葦北郡加藤領で「乱妨取」。200人以上を島津領へ連行〔稲葉02〕。

### (5) けっきょく、清正の軍事行動の根底にあった思惑とは？

- ・ 先行研究は、関ヶ原合戦前後に各地でみられた軍事行動を「私戦の復活」と評価〔白峰11〕。
- その結果、清正の軍事行動も自身の意思で所領拡大を目指したものと捉えられてきた。
- ※ただ、大名がみな「私戦」での領地拡大を狙っていたとみていい？戦国期以来の大名と豊臣取立大名の間に違いはない？本戦や大津城攻め等に参加していた面々はどう評価される？
- ・ 清正の場合、細川勢の救援、家康から付与を約束された肥後・筑後での軍事行動がまず優先。

- 領地拡大を目指す指向性があった点は否定しないが、東軍大名との関係性、そして家康の意向を踏まえつつの軍事行動だと評価することも（ことが）可能であり、そうした評価も必要。
- ⇒七将襲撃事件に象徴される三成との遺恨、庄内の乱以来の家康との微妙な関係を踏まえると、東軍として活動することが自身の政治的立場の維持・向上の近道と考えていたのでは？

**【参考文献】**

- 稲葉継陽 2002 「戦国から泰平の世へ」『日本の中世12村の戦争と平和』中央公論新社
- 白峰旬 2011 『新「関ヶ原合戦」論定説を覆す史料最大の戦いの真実』新人物往来社
- 水野勝之・福田正秀 2007 『加藤清正「妻子」の研究』ブイツーソリューション
- 光成準治 2019 『シリーズ・実像に迫る18九州の関ヶ原』戎光祥出版
- 山田貴司 2014 a 「関ヶ原合戦前後における加藤清正の動向」同編『シリーズ・織豊大名の研究2 加藤清正』戎光祥出版
- 山田貴司 2014 b 「総論加藤清正論の現在地」『シリーズ・織豊大名の研究2 加藤清正』
- 山田貴司 2022 「加藤清正文書にみえる「跡書」文言」『七隈史学』24号

## 「関ヶ原合戦」の理解を助けるための用語解説

九州文化財研究所 研究部長 花岡 興史

関ヶ原合戦の研究は、『愛知県史』『静岡県史』などの編纂事業をとおして急速の進展をみせている徳川家康の研究とあわせて、多くの研究者が参加し、新たな成果が多くみられる。このため、今までの多くの通説が改められる結果となっている。今回、比較的に入手しやすい良質の出版物により、気鋭の研究者たちのそれぞれの見解に注目しながら、用語解説を行いたい。

### ○豊臣秀吉の「遺言覚書」と「遺言体制」

豊臣秀吉は、慶長3年（1598）8月18日に死去するが、嗣子秀頼は6歳という幼少であり、成人までの間の政務体制を構築が急務となった。秀吉は、その二カ月前の6月下旬ころから、病床に徳川家康・前田利家などの有力大名や、石田三成・浅野長政といった秀吉の直臣を呼び、遺言を残し誓約をさせて政権運営を委ねている。この死に臨んで整えた秀吉の政治機構を、水野伍貴氏は「遺言体制」と呼んでいる（水野伍貴「関ヶ原の戦い 秀吉の『遺言体制』の否定と決戦への道のり」『江戸幕府の誕生』2022）。

秀吉の意向を汲む全11カ条の「遺言覚書」の内容は、家康・前田利家・徳川秀忠・前田利長（前田利家の嫡子）・宇喜多秀家・上杉景勝・毛利輝元に対して、秀頼の取り立てを要請している。このなかで、家康と利家は高齢であるので、次世代の秀忠と利長の名も記されている。また、五奉行の蔵入地（豊臣直轄地）の管理などは家康・利家の検閲を受けることや、家康が伏見に入城し政務を執り、利家は大坂城に入り秀頼を補佐することなどが記されていた（本多隆成『徳川家康の決断』、2022）。

前掲の水野氏によれば、この8月5日付で五大老（徳川家康・前田利家・宇喜多秀家・上杉景勝・毛利輝元）に宛てた遺言には、「返す返す、秀頼のことはお頼みます。五人の衆（五大老）お頼みます」とあり、死期を悟った秀吉の懇願であった。また、「いさい（委細）五人の物（五奉行）に申しわたし候」とあるように、政務・財務や、豊臣家にかかわる主要な部分は、豊臣家の家老というべき直臣の五奉行に委ねられていた。一方、五大老の役割は、五奉行では解決できない事態への対応と五奉行への承認が中心となり、それぞれの関係は相互補完とされた。

水野氏によると、この「遺言体制」は、8月上旬に変更が度々なされており、知行配当については家康と五奉行の多数決、政務は五奉行の多数決制に決定した。これにより、家康は他の4人の大老に対して優位性を持つことになる。しかし、その後、秀吉が8月18日に死去すると、浅野長政を除く4人の奉行衆が、独自に毛利輝元と盟約を結んで派閥を形成するなど対立を生みはじめ、「遺言体制」はうまく機能しなくなった。この状況を解決するために、9月3日付の五大老・五奉行の連判誓紙により、10名の多数決による政権運営が誕生した。

ただ、この「遺言体制」は慶長4年正月の家康と伊達政宗の私婚問題が浮上したことにより、機能しなくなった。

### ○会津攻めと「直江（兼継）状」

慶長3年（1598）、上杉景勝は、北陸筋の防衛と奥州の伊達政宗の備えとして、豊臣秀吉の命により

会津 120 万石に移封された。景勝は、秀吉の訃報に際し、同年 10 月に上洛し伏見に滞在したあと、翌年 8 月、会津に帰国した。慶長 5 年 2 月、越後の堀氏より、景勝が武器を集め道・橋をつくっているという報告があり、家康は謀反を疑い上洛を促すが、景勝は会津を動かさなかった。そのため、家康は会津攻めを決意したとされる。

これに先立ち、家康より上杉との交渉役を務めた西笑承兌<sup>せいしょうじょうたい</sup>は、上杉景勝の上洛遅延や上杉家と隣国越後の堀家との係争について、「内府様（家康）が不審を持っているので、熟慮が大切である」といった内容の書状を出している。

これに対し、上杉景勝の宰相である直江兼続が、慶長 5 年 4 月 14 日付で西笑承兌に宛てた書状（返書）が「直江状」と呼ばれるものである。江戸幕府の正史『徳川実記』には「傲慢無礼」と記されるなど、家康に対して挑戦的な内容で書かれており、家康は、この書状により関ヶ原合戦のきっかけとなる会津征伐を決定したとされている。なお、この「直江状」と称されている史料は、原文書は無く、何点かの写本が存在する。

「直江状」については、文章が整いすぎているなど、史料としての信ぴょう性が早くから疑われており、桑田忠親氏は「後世の好事家の偽作（桑田忠親「関ヶ原の戦い」『日本の合戦』第七巻、1965）」といい、また二木謙一氏は「『直江状』と称する古文書が偽作されたほどである（二木謙一『関ヶ原合戦』1982）」と述べている。

これに対して、近年、偽文書ではないが、江戸時代に繰り返し写されていく過程で、追加・改変されて美文化されるといった評価が多くなされるようになった。山本博文氏は「当事者しか知り得ない事実がかなり書き込まれています（山本博文『天下人の一級史料』2009）」としている。他にも白峰旬氏は、上杉景勝と対峙する堀家について、「上杉家として公平な裁定を求めたまじめな内容であり、家康への挑戦状ではない。（中略）直江状の史料的信憑性は肯定的に捉えることができる。（中略）直江状を出したことが家康による上杉討伐の直接原因になったとは考えられない（白峰旬『新「関ヶ原合戦」論』2011）」と結論付けている。

会津討伐は、上杉家の不穏な行動があれば豊臣政権をあずかる家康がそれを見逃すことが出来ず、秀吉恩顧の大名を動員するためには正当な理由が必要であった。実際にその正当性により、討伐軍には大谷吉継が参加する予定もあった。ただ、景勝の行動は、家康が上方を離れたのを機に挙兵した石田三成と最初から申し合わせたわけではなく、「直江状」との直接関係は考えられない。

## ○ 「内府ちかひ（違い）の条々」

徳川家康の会津出陣後の慶長 5 年 7 月 17 日に、大坂町奉行（増田長盛・長束正家・前田玄以）より出された、家康に対する 13 カ条の弾劾状である。以下、矢部健太郎氏の見解（矢部健太郎『関ヶ原合戦と石田三成』、2014）による。

この中心人物である石田三成は、この時、蜂須賀家政・黒田長政らの七将に暗殺を計画された「七将襲撃事件」の責任を取り佐和山城に逼塞しており、このような状況では、むしろ領国統治に注力できるうえ、盟友の大谷吉継や、反徳川で協調する真田昌幸とも連絡が取りやすい状態だった。7 月 12 日に三成と吉継は、増田長盛と安国寺恵瓊と会談を行い、その結果、毛利輝元の大坂城の入城が決定され、反家康勢力が編成された。この時に出されたのが「内府ちかひの条々」である。

内容は、家康が秀吉時代の政策、法令や起請文に背いているといった行為を具体的に取り上げて厳し

く非難している。この主体者は、添状を発給した毛利輝元・宇喜多秀家・増田長盛・長束正家の5名である。矢部氏は、「一見わずか5名のようなのだが、家康に遠ざけられた前田利長・上杉景勝と石田三成・浅野長政、そして弾劾を受けた当人家康を除く『十人衆』のメンバー全員が家康を弾劾した事実は見逃せない」としている。なぜなら、彼らの上には秀頼がおり、秀頼にかわって家康を弾劾したことになる。

これにより、家康の会津出陣の正当性は否定され、家康軍は景勝討伐の豊臣正規軍の立場を剥奪されたのである。代わりに「内府ちかひの条々」を出したメンバーが豊臣正規軍となったのである。もしこの時、秀頼が石田三成ら大坂方を豊臣正規軍と認める態度をとり、さらには自分も大坂城を出て出陣していたら、豊臣恩顧の大名はおそらく弓を向けられなかった可能性も否定できないものでもあった。

この「内府ちかひの条々」により、家康は上杉討伐を中止せざるを得ない結果となり、政治的・軍事的正当性を失った。また、この条々は大名たちに周知されていたため、家康が豊臣公儀から排除されたことは明白で、別に徳川公儀を立てなくてはならなくなった。そのため、政治的な妥協、つまり併存するために「二重公儀体制」を取らざるを得なかった。なお、一元的公儀は大坂の陣による豊臣氏の滅亡を待たなければならなかった（白峰旬『新「関ヶ原合戦」論』）。

## ○小山評定

徳川家康は、越後の堀氏より上杉景勝領周辺から不穏な動きを察した報告を受け、景勝に上洛を促すがそれを拒否され、会津への出兵を決定する。慶長5年6月15日に家康は秀頼に暇乞いをし、豊臣政権下の軍事行動として上杉討伐のため出陣した。ところが、7月下旬に上方で石田三成・大谷吉継による拳兵の報に触れ、最上義光に進軍を止めさせ、宇都宮に集結しつつあった豊臣系の諸将に、小山（栃木県小山市）に集まるように指示した。家康は小山に到着すると、7月25日に「小山評定」を開いた（本多隆成『徳川家康の決断』、2022）。この時、福島正則が率先して家康の味方につくことを主張し、それを聞いた諸将も次々に味方し、家康軍は石田三成を討つために西上を決定した。この評定は関ヶ原合戦の帰趨を決定づけたもので、その歴史的意義は大きいとされる。

これに対し、白峰旬氏は「小山評定は歴史的事実ではない」とのべている（白峰旬『関ヶ原合戦の真実』2014）。同氏によれば、小山評定の内容は、静まりかえった評定の場で福島正則が家康に味方することを大見得切って真っ先に発言することや、山内一豊の発言のくだりも知らない人がいないほど、非常に感動的なストーリーである。これは、家康が秀吉恩顧の諸将からいかに信望が厚かったかを象徴する出来事として受け止められている。

しかし、まるで見てきたかのような雄弁な記述は全て後世のもので、直接言及した同時代の一次史料は皆無である。通説では、7月25日に開かれたとされる小山評定の根拠となる史料は、その前日付の福島正則宛家康書状写（『武徳編年集成』所収）であるが、これは元文5年（1740）に幕臣の木村高敦が著した歴史書であり、家康を「神君」と表記するなど、その業績を過度に美化する徳川史観のバイアスがかかっていることに注意しなければならない。その日付についても、江戸時代中期頃には7月24日とするが、時代が下り幕末になると25日となっており、現在の通説はこの影響を受けていると思われる。また、この評定に参加したとされる黒田長政は、光成準治氏によれば参加していなかった可能性を示唆されている（光成準治『関ヶ原前夜』2009）。

このように、小山評定に関する一次史料が発見されていない段階では、白峰氏は「江戸時代の軍記物やその他の編纂史料が作りだした想像の産物であり、後世の江戸時代に誕生した架空の話（フィクショ

ン) であって、歴史的事実ではないと断ぜざるを得ないのである」としている。

この批判を受けた本多隆成氏は、前述の福島正則宛家康書状写について、一定度の信ぴょう性はあり、白峰氏が家康の行程を検証して、7月23日に宇都宮に着陣し、江戸城に8月2日に戻るまではそのまま滞在し、小山には行っていないという内容に対して、新たに検討を加え、7月24日に着陣し江戸へ戻るまで小山に在陣していたとする。

実際に、家康軍が西上したという事実はあるので、軍勢に関しての何らかの方針転換はあったと考えられるが、それを決定的な「小山評定」とするのかという視点は必要であろう。

## ○二重公儀体制

徳川氏は、慶長5年(1600)の「関ヶ原合戦」に勝利し、その後、同8年に征夷大將軍に就任した。これにより、徳川幕府の開設という制度が完成し、豊臣秀頼の政治体制が失墜したと従来は理解されていた。しかし、笠谷和比古氏はこれに対し、家康が將軍宣下を受けても秀吉の遺児秀頼は大坂におり、將軍と幕府の支配から独立した、いわゆる関白型公儀の政治体制が解体されずに残っていた。これは当時の統治技術の限界からしても自然なことである。よって、秀頼はそこに君臨するものとしての權威の保持者として認識されており、その政治的權威を何ら侵すものではないとし、このように公儀を分有されていた政治状況を「二重公儀体制」と提唱した。

その根拠について、笠谷氏は、次の7例を挙げて述べている(笠谷和比古『関ヶ原の合戦と近世の国制』思文閣2000)。

### (1) 豊臣秀頼に対する伺候の礼

慶長8年の江戸幕府開設後も、加藤・福島らの豊臣恩顧の大名だけではなく、上杉景勝・島津家久のような外様大名まで、大坂城にいる秀頼に対し歳首を賀すことで、伺候の礼をとり続けていた。

### (2) 勅使・公家衆の大坂参向

慶長8年以後も、歳首の賀儀の際は、朝廷からの勅使が秀頼の下に毎年派遣されており、また親王・公家・門跡衆も参向していた。

### (3) 慶長期の伊勢国絵図の記載

慶長10年の作成と推定される国絵図についての上野秀治氏による指摘(『三重県史』近世資料編、1987)を受けて、家康重臣の本多忠勝領を含む桑名領に記される小領主の中に、秀頼家臣が複数確認できる。つまり、豊臣家は、家康から指揮を受ける一大名では無く、同等かそれ以上の官位を有していたことを示唆している。

### (4) 慶長11年の江戸城普請における豊臣奉行人の介在

全国の諸大名を動員して行われた、関ヶ原合戦後の最大規模の大名課役である天下普請に秀頼は動員されておらず、白峰旬氏の指摘にもあるように、普請奉行として任命された8人の中に知行1000石クラスの秀頼家臣が2名含まれていた。つまり、この時の江戸城普請は、將軍の政治的支配力のみをもって実現したものではなく、秀頼の同意のもと、公儀の名においてなされた公共的性格を携えた

事業であり、豊臣家と徳川将軍家は公儀を分有する存在であった。

#### (5) 秀頼への普請役賦課の回避

幕府が諸大名に対して、江戸城・駿府城・伏見城などの普請課役を大名軍役に準じて賦課しているが、秀頼に対してはそのような賦課はなかった。ただ、慶長12年3月の駿府城普請には、秀頼の領知に対して課役が賦課されているが、これは公家や寺社の所領に賦課されるのと同様の課役である国役であった。つまり、この国役賦課は公家・寺社が将軍の従臣ではないことと同様に、秀頼が徳川将軍家の従臣では無いことを意味し、徳川幕府は秀頼に対する臣従の強制を差し控えていることになる。

#### (6) 二条城の会見における礼遇

慶長16年の京都二条城における家康と秀頼の会見について、徳川の関係者が情報を入手して書かれたと考えられる『当代記』には、家康が秀頼に対して、「御成之間」という同城最高の座席に通している。また、その時に「互いの礼」、つまりお互いに対等の立場で礼儀を行うことを提案したが、秀頼は遠慮してこれを固辞したという。つまり、この会見は、通説がいう家康に対する秀頼の臣従を意味するものではなく、家康が秀頼を庭上まで出迎えるという最高の礼遇を行っており、臣従の強制ではない。また、秀頼の家康に対する拝礼は自発的なものであり、臣従礼ではなく、舅に対する孫賀や朝廷の官位の上での従一位に対する正二位の者の献上の礼と見るべきである。

#### (7) 慶長16年の三カ条誓詞

二条城会見は、秀頼が徳川の城である二条城に赴いて家康に拝礼した頃から、徳川将軍を頂点とする政治体制の優位が確定したと通説は述べる。

しかし、直後の同年4月12日付で、徳川幕府が全国の諸大名に対して三カ条からなる誓詞を徴したが、ほとんどの大名が署名しているにも関わらず、秀頼はこれに含まれていない。つまり、この段階でも秀頼は諸大名に比して別格であり、徳川将軍の支配下に編入される存在ではなく、同年の二条城会見において家康に対して行った拝礼は、決して臣従礼では無いことを首肯する。

また、三カ条誓詞の先蹤をなした天正16年(1588)の後陽成天皇の聚楽第行幸のうちに、関白秀吉の意命に恭順を示す諸大名から提出された三カ条誓詞には、秀吉の旧主家である織田一門の代表の信雄や正嫡の秀信も、徳川家康以下の諸大名とともに連署している。家康は、この前例があるにも拘わらず、これを踏襲することなく連署から秀頼を除外している。

#### ※ 「関ヶ原合戦」をより深く知るための出版物（本稿で参照した以外のものも含む）

- ・笠谷和比古『関ヶ原合戦 家康の戦略と幕藩体制』講談社選書メチエ、1994年
- ・笠谷和比古『関ヶ原合戦と近世の国制』思文閣出版、2000年
- ・笠谷和比古『関ヶ原合戦と大坂の陣』吉川弘文館、2007年
- ・笠谷和比古『論争関ヶ原合戦』新潮選書、2022年
- ・黒田基樹『徳川家康の最新研究 伝説された「天下人」虚像をはぎ取る』朝日新書、2023年
- ・白峰旬『新「関ヶ原合戦」論 定説を覆す史上最大の戦いの真実』新人物ブックス、2011年

- 
- ・白峰旬『新視点関ヶ原合戦 天下分け目の戦いの通説を覆す』平凡社、2019年
  - ・白峰旬編著『関ヶ原大乱、本当の勝者』朝日新書、2020年
  - ・中野等『人物叢書 立花宗茂』吉川弘文館、2001年
  - ・中野等『【柳川の歴史】3 筑後国史 田中吉政 忠政』柳川市、2007年
  - ・中野等『石田三成伝』吉川弘文館、2016年
  - ・二木謙一『関ヶ原合戦 戦国のいちばん長い日』中公新書、1982年
  - ・堀新・井上泰至編『家康徹底解説 ここまでわかった本当の姿』文学通信、2023年
  - ・本多隆成『定本徳川家康』吉川弘文館、2010年
  - ・本多隆成『徳川家康の決断 桶狭間から関ヶ原、大坂の陣まで10の選択』中公新書、2022年
  - ・光成準治『関ヶ原前夜 西軍大名たちの戦い』NHK ブックス、2009年
  - ・光成準治『シリーズ・実像に迫る 018 九州の関ヶ原』戎光祥出版、2019年
  - ・矢部健太郎『関ヶ原合戦と石田三成』吉川弘文館、2014年
  - ・山田貴司編著『加藤清正』2014年
  - ・渡邊大門『関ヶ原合戦は「作り話」だったのか』PHP 親書、2019年
  - ・渡邊大門編『江戸幕府の誕生 関ヶ原合戦後の国家戦略』文学通信、2022年
  - ・渡邊大門『関ヶ原合戦全史』草草社、2021年



## 「九州の関ヶ原」関連諸将略伝

九州文化財研究所 調査研究室室長補佐 石橋 和久

## あ

あきづき たねなが  
秋月 種長 永禄10年(1567)～慶長19年(1614)

筑前国古処山城主秋月種実の長男。天正14年(1586)、豊臣秀吉の九州平定では、父と共に豊臣軍と戦うが敗れて降伏する。その後、父が隠居したため、家督を継ぎ当主となる。間もなく、秀吉により秋月から日向国財部(のち高鍋)3万石に移封される。関ヶ原合戦では、最初大坂方(西軍)であったが、のちに家康方(東軍)に従って功を挙げたため、所領を安堵された。

ありま はるのぶ  
有馬 晴信 永禄10年(1567)～慶長17年(1612)

肥前国日野江城主有馬義貞の次男。兄の義純が早世したため家督を継承する。天正12年(1584)、沖田暲の戦いで島津氏と共に龍造寺隆信を破り、その後の豊臣秀吉による九州平定では、島津氏を離れ豊臣軍に加わる。関ヶ原合戦では家康方(東軍)につき、加藤清正と共に宇土城を攻撃することとなり、子の直純が名代として出陣した。

いとう すけのり  
伊東 祐慶 天正17年(1589)～寛永13年(1636)

日向国飫肥城主伊東祐兵の長男。関ヶ原合戦では家康方(東軍)につき、大坂方(西軍)の高橋元種の抛る日向国宮崎城を落城させた。戦後、家康より所領を安堵される。慶長5年(1600)10月、父祐兵が大坂にて病死したため、家督を継ぐ。

おおた かずよし  
太田 一吉 生年不詳～元和3年(1617)

はじめ丹羽長秀に仕える。長秀の死後は豊臣秀吉に仕え、慶長2年(1593)、6万5千石を与えられ、豊後国白杵城主となる。関ヶ原合戦では大坂方(西軍)につき、近江国瀬田橋を警固した。白杵にいた子の一成は、細川忠興の家老松井康之の守る豊後国木付(杵築)城を攻撃するが、撃退される。戦後は所領没収となり、京都に隠棲した。

おおとも よしむね  
大友 義統 永禄元年(1558)～慶長10年(1605)

大友義鎮(宗麟)の長男。天正元年(1573)に家督を相続。天正14年(1586)に島津氏の侵攻を受けるが、豊臣秀吉の九州平定により豊後一国を安堵された。文禄の役時、平壤攻防戦からの退却を咎められ改易となる。関ヶ原合戦では大坂方(西軍)につき、毛利輝元の支援を受けて豊後国に上陸し、大友旧臣と合流して国東半島の諸城を落とした。その後、石垣原の戦いで黒田如水(孝高)に敗れ、出羽国の秋田家へ預けられた。

おおむら よしあき  
大村 喜前 永禄12年(1569)～元和2年(1616)

肥前国三城城主大村純忠の長男。関ヶ原合戦では家康方(東軍)につき、大坂方(西軍)の小西行長領攻めに家臣を派遣した。戦後、肥前国彼杵郡2万8千石の所領を安堵される。なお、天正少年使節

の副使千々石ミゲルは従兄弟にあたる。

## か

かきみ かずなお  
垣見 一直 生年不詳～慶長 5 年 (1600)

豊臣秀吉に仕え、文禄 2 年 (1594) に豊後国内の太閤蔵入地の代官に任じられる。翌年、豊後国国東郡富来に 2 万石を与えられた。関ヶ原合戦では大坂方 (西軍) につき、熊谷直盛らと共に山城国伏見城攻めに参加し、美濃国大垣城に籠城する。しかし、家康方 (東軍) に内通した相良頼房の家老相良いんどう よりもり (犬童) 頼兄によって謀殺された。

かとう きよまさ  
加藤 清正 永禄 5 年 (1562) ～慶長 16 年 (1611)

尾張国の生まれ。幼少時より豊臣秀吉に仕える。天正 11 年 (1583)、賤ヶ岳の戦いで活躍し、のちに「七本槍」の一人に数えられた。天正 16 年 (1588)、佐々成政の後を受け、肥後北半国 (芦北郡を含む) を領有した。領地高約 19 万 5 千石。文禄・慶長の役に出兵する。関ヶ原合戦では家康方 (東軍) に与した。戦後、肥後一国 (天草・球磨郡を除く) 及び豊後国の一部 54 万石を与えられる。のち、跡を継いだ加藤忠広のとき、子光広の児戯を咎められたのを切掛に、寛永 9 年 (1632)、出羽国庄内に配流され、加藤氏は断絶となる。

くまがい なおもり  
熊谷 直盛 生年不詳～慶長 5 年 (1600)

豊臣秀吉に仕え、文禄 2 年 (1594) に豊後国内の太閤蔵入地の代官に任じられる。翌年、豊後国安岐 1 万 5 千石を与えられる。関ヶ原合戦では大坂方 (西軍) につき、垣見一直らと共に山城国伏見城攻めに参加し、美濃国大垣城に籠城する。しかし、家康方 (東軍) に内通した相良頼房の家老相良 (犬童) 頼兄によって謀殺された。

くろだ じょすい よしたか  
黒田 如水 (孝高) 天文 15 年 (1546) ～慶長 9 年 (1604)

播磨国御着城主小寺氏の家老黒田職隆の長男。名は孝高。晩年に出家して如水と号した。はじめは小寺氏に仕えていたが、その後羽柴秀吉に仕え、中国征伐・九州征伐で活躍する。九州征伐後、豊前国中津に 12 万石を与えられた。関ヶ原合戦では、石垣原の戦いで大友軍を破る。また関ヶ原本戦では、嫡男長政が家康方 (東軍) の勝利に大きく貢献した。戦後、長政に筑前国 52 万石が与えられる。

こにし ゆきかげ  
小西 行景 生年不詳～慶長 5 年 (1600)

堺の商人小西隆佐の三男。小西行長の弟。行長が肥後南半国を領有すると、5 千石を与えられ、宇土城代となる。関ヶ原合戦では留主居役として宇土城を任される。大坂方 (西軍) が敗れたことが伝わり、城を開城し切腹したとされる。

こにし ゆきしげ  
小西 行重 生年不詳～慶長 7 年 (1602) 頃

肥後南半国を領有した小西行長の家臣。もとの名は木戸末郷。手柄により小西姓を与えられ、小西行重と改名した。八代 (麦島) 城代を務め、関ヶ原合戦では、同城を守備していた。戦後、行長が刑死したのちは、薩摩の島津家に仕えた。

さ

さがら よりふさ  
相良 頼房 天正2年(1574)～寛永13年(1636)

肥後国人吉城主相良義陽の次男。天正9年(1581)に父義陽が響野原の戦いで戦死し、家督を継いだ兄の忠房も急逝したため、天正13年(1585)に12歳で家督を継承した。以後は島津氏に従い、大友氏攻めなどに従軍した。豊臣秀吉の九州平定軍に降伏し、所領を安堵された。関ヶ原合戦では、はじめは大坂方(西軍)に加わって伏見城攻防戦などに参加したが、本戦で大坂方(西軍)が壊滅すると、家康方(東軍)に寝返った。戦後、家康から所領を安堵されて存続を許され、2万石の人吉藩初代藩主となる。

しまづ ただなが  
島津 忠長 天文20年(1551)～慶長15年(1610)

島津貴久の弟尚久の長男。島津義久の従兄弟。耳川の戦いや沖田畷の戦いなどで軍功を挙げる。関ヶ原合戦では、加藤清正の軍勢を警戒し、国境の警備役を務めた。戦後、徳川家康との和議の使者となる。

しまづ とよひさ  
島津 豊久 元亀元年(1570)～慶長5年(1600)

島津四兄弟の末弟島津家久の長男。父の死後、家督を継ぎ日向国佐土原城主となる。関ヶ原合戦では、島津義弘に従って大坂方(西軍)として本戦に参陣する。家康方(東軍)の勝利後、島津軍は撤退することになるが、豊久は義弘を逃がすため殿しんがりを務め討死した。

しまづ よしひさ  
島津 義久 天文2年(1533)～慶長16年(1611)

島津貴久の長男。永禄9年(1566)、父の隠居により家督を相続。薩摩・大隅・日向の三州を制圧し、耳川の戦いで大友氏に大勝した。また、沖田畷の戦いでは龍造寺氏を打ち破り、一時は九州の大半を制圧していた。しかし、天正15年(1587)に豊臣秀吉の九州平定を受け降伏し、薩摩・大隅の2か国と日向国の一部を安堵される。関ヶ原合戦では、弟の義弘が大坂方(西軍)として本戦に参加し、義久は加藤領の佐敷に軍勢を派遣し包囲した。慶長7年(1602)に徳川家康により所領を安堵された。

た

たかはし もとなね  
高橋 元種 元亀2年(1571)～慶長19年(1614)

筑前国古処山城主秋月種実の次男。天正6年(1578)、豊前国小倉城主高橋鑑種の養子となる。養父の死後、高橋家を継いだ元種は、実家の秋月家に協力して、大友家に敵対する。天正15年(1587)、豊臣秀吉の九州平定で降伏し、日向国延岡に5万3千石を与えられた。関ヶ原合戦では大坂方(西軍)につき、兄の秋月種長と美濃国大垣城に籠城した。大坂方(西軍)が敗れると種長と共に家康方(東軍)に寝返り、所領を安堵された。

たけなか たかしげ  
竹中 隆重 永禄5年(1562)～元和元年(1615)

羽柴秀吉の参謀竹中重治(半兵衛)の従弟もしくは甥にあたる。はじめ重治に仕えていたが、重治の死後、秀吉の直臣となる。文禄3年(1594)、豊後国国東郡高田に1万3千石を与えられる。関ヶ原合戦では、はじめは大坂方(西軍)であったが、のちに黒田如水に誘われて家康方(東軍)に寝返り、豊後国府内2万石に加増転封された。

たちばな むねしげ  
**立花 宗茂** 永禄 10 年 (1567) ~ 寛永 19 年 (1642)

大友氏の重臣高橋鎮種 (紹運) の長男。天正 8 年 (1580)、立花鑑連の養子となり、天正 13 年 (1585) 家督を相続。天正 15 年 (1587) の豊臣秀吉の九州平定では豊臣軍の先鋒を務めた。その戦功により筑後国柳川 13 万石余を与えられる。関ヶ原合戦では、大坂方 (西軍) に属して改易されたが、慶長 8 年 (1603)、徳川秀忠に召し出されて、陸奥国棚倉に 1 万石を与えられた。大坂冬・夏の陣に参戦。元和 6 年 (1620)、再び柳川周辺に 10 万 9 千石余を与えられ、旧領のほとんどを回復した。寛永 15 年 (1638)、天草・島原の乱の鎮圧に参加。

てらざわ ひろたか  
**寺沢 広高** 永禄 6 年 (1563) ~ 寛永 10 年 (1633)

豊臣秀吉に仕え、肥前国唐津 8 万石を与えられる。関ヶ原合戦では家康方 (東軍) につき、戦功により肥後国天草 4 万石を加増され、計 12 万石を領有した。しかし、子堅高の代に天草・島原の乱が起き、責任を問われ天草 4 万石を没収された。

## な

なかがわ ひでしげ  
**中川 秀成** 元亀元年 (1570) ~ 慶長 17 年 (1612)

摂津国茨木城主中川清秀の次男。文禄元年 (1592)、朝鮮出兵中の兄秀政が戦死したため、家督を継ぎ播磨国三木城主となる。文禄 3 年 (1594)、豊後国岡 7 万 4 千石に移封。関ヶ原合戦では家康方 (東軍) につき、大坂方 (西軍) の拠点豊後国臼杵の太田一吉を攻めた。戦後、家康より所領を安堵される。豊後岡藩主中川家初代。

なべしま なおしげ  
**鍋島 直茂** 天文 7 年 (1538) ~ 元和 4 年 (1618)

肥前国佐賀郡を拠点とした鍋島清房の次男。龍造寺隆信の従兄弟であり、義理の兄弟でもある。龍造寺隆信に仕え各地を転戦し、天正 12 年 (1584) に隆信が沖田畷の戦いで敗死したことにより、龍造寺家内においてしだいに実権を掌握する。文禄・慶長の役への参戦で龍造寺家に代わり、肥前国佐賀領の支配者としての地位を確立した。関ヶ原合戦では、嫡子勝茂が当初大坂方 (西軍) についたが、直茂が大坂方 (西軍) の久留米城や柳川城を攻略したことで、辛うじて本領を安堵された。慶長 15 年 (1610) 隠居。

## は

はやかわ ながとし  
**早川 長敏** 生没年不詳

豊臣秀吉に仕え、文禄 2 年 (1594) に豊後国内の太閤蔵入地の代官に任じられる。翌年、豊後国大分郡内に 1 万 5 千石を与えられる。慶長 2 年 (1597)、慶長の役での働きに落度があったとして改易されるが、慶長 4 年 (1599) に豊後国府内に 2 万石を与えられる。関ヶ原合戦では、大坂方 (西軍) について丹後国田辺城の戦いに参加する。国許の府内城は家康方 (東軍) の細川忠興軍に降伏し、戦後改易された。

ま

まつい やすゆき  
松井 康之 天文19年(1550)～慶長17年(1612)

室町幕府からの重臣松井正之の次男。はじめ將軍足利義輝に仕え、のち細川藤孝・忠興に従う。関ヶ原合戦では、豊後国木付(杵築)城を守って大坂方(西軍)の大友義統の攻撃を防ぎ、黒田如水と合流して石垣原の戦いで勝利した。戦後、忠興が豊前國中津藩主となると、豊後国木付(杵築)2万6千石を与えられた。その後、子孫は代々熊本藩の筆頭家老として3万石を知行し、八代城代に任じられた。

まつら しげのぶ  
松浦 鎮信 天文18年(1549)～慶長19年(1614)

肥前国の戦国大名松浦隆信の長男。永禄11年(1568)、家督を相続。豊臣秀吉の九州平定に参陣し、所領を安堵される。関ヶ原合戦では、大坂にいた長男久信は大坂方(西軍)についたが、肥前にいた鎮信は家康方(東軍)に加わったため肥前松浦郡6万3千石の所領を安堵された。また、オランダ船を平戸に入港させ、平戸貿易の基礎をつくった。

もうり かつのぶ  
毛利 勝信 生年不詳～慶長16年(1611)

初姓は森。豊臣秀吉に仕え、天正15年(1587)、豊前國小倉6万石を与えられる。その際に秀吉より毛利姓に改めるように命じられる。関ヶ原合戦では大坂方(西軍)についたため、戦後、子の勝永と共に土佐国の山内一豊に預けられた。

もうり たかまさ  
毛利 高政 永禄2年(1559)～寛永5年(1628)

初姓は森。羽柴秀吉に近習として仕える。本能寺の変後、毛利氏との停戦に際し、秀吉から毛利氏へ人質として送られる。この時の縁で、のちに毛利姓となる。文禄4年(1595)、豊後国日田2万石を与えられ、日隈城主となる。関ヶ原合戦では大坂方(西軍)につき、丹後国田辺城攻めに参加。所領の日隈城は、豊前國中津城主の黒田如水の軍勢に包囲されて開城した。

もうり ひでかね  
毛利 秀包 永禄10年(1567)～慶長6年(1601)

毛利元就の九男。異母兄である小早川隆景の養子となる。筑後国内に13万石を与えられ、久留米城主となる。関ヶ原合戦では大坂方(西軍)につき、近江国大津城を立花宗茂らと共に攻め落城させた。戦後改易され、毛利輝元より長門国内に所領を与えられた。長州藩の一家家老である吉敷毛利家の祖となる。

## 関ヶ原合戦年表

和暦	西暦	月日	九州情勢	国内情勢
天正15	1587	5月	島津氏が豊臣秀吉に降伏した。九州の国分が実施された。	
		7月	肥後国で「国衆一揆」が起こった。	
天正16	1588	閏5月	肥後国主の佐々成政が改易され、そのあとに加藤清正と小西行長が入国した。	
文禄2	1593	5月	豊後国主の大友吉統が改易され、そのあとに中川秀成らが入国した。	
慶長3	1598	8月18日		豊臣秀吉が伏見城（山城国）で死去した。
		11月		諸将が朝鮮から撤退した。
慶長4	1599	3月9日	島津忠恒が家臣の伊集院忠棟を殺害した。	
		閏3月3日		前田利家が死没し、その直後に加藤清正らが石田三成を襲撃した。これにより光成が失脚した。
		閏3月10日		石田三成が佐和山城（近江国）に入った。
		4月	伊集院忠棟の子忠真の反乱（庄内の乱）が起こった。	
		8月		五大老の上杉景勝と前田利家の子利長が国元へ帰国した。
		9月		前田利長と徳川家康が対立した。
慶長5	1600	2月	細川氏に対して、豊後国速見郡などが加増された。	
		3月	庄内の乱が終結した。	
		6月16日		徳川家康が陸奥国会津征討に向けて大坂を出立した。
		7月2日		徳川家康が江戸城（武蔵国）に入った。
		7月11日		大谷吉継が佐和山城（近江国）に入り、石田三成と家康討伐の盟を結んだ。
		7月12日		石田三成らが反徳川闘争に決起し、豊臣奉行衆が毛利輝元へ上洛を要請した。
		7月15日	毛利輝元が広島出立の際、加藤清正に上洛を呼びかけた。	
		7月17日		豊臣奉行衆により、家康弾劾状（内府ちかひく違ひの条々）を發した。 大坂方（西軍）総大将の毛利元就が大坂城（摂津国）に入った。
		7月19日		大坂方（西軍）が伏見城（山城国）を攻撃した。
		7月20日	岡城（豊後国）城主の中川秀成が帰国した。	
		7月21日		徳川家康が陸奥国会津の上杉征伐のため江戸を出立した。
		7月24日		徳川家康が下野国小山で石田三成等の挙兵を知った。
7月25日		徳川家康が下野国小山で今後の方針を協議した（小山評定）。		

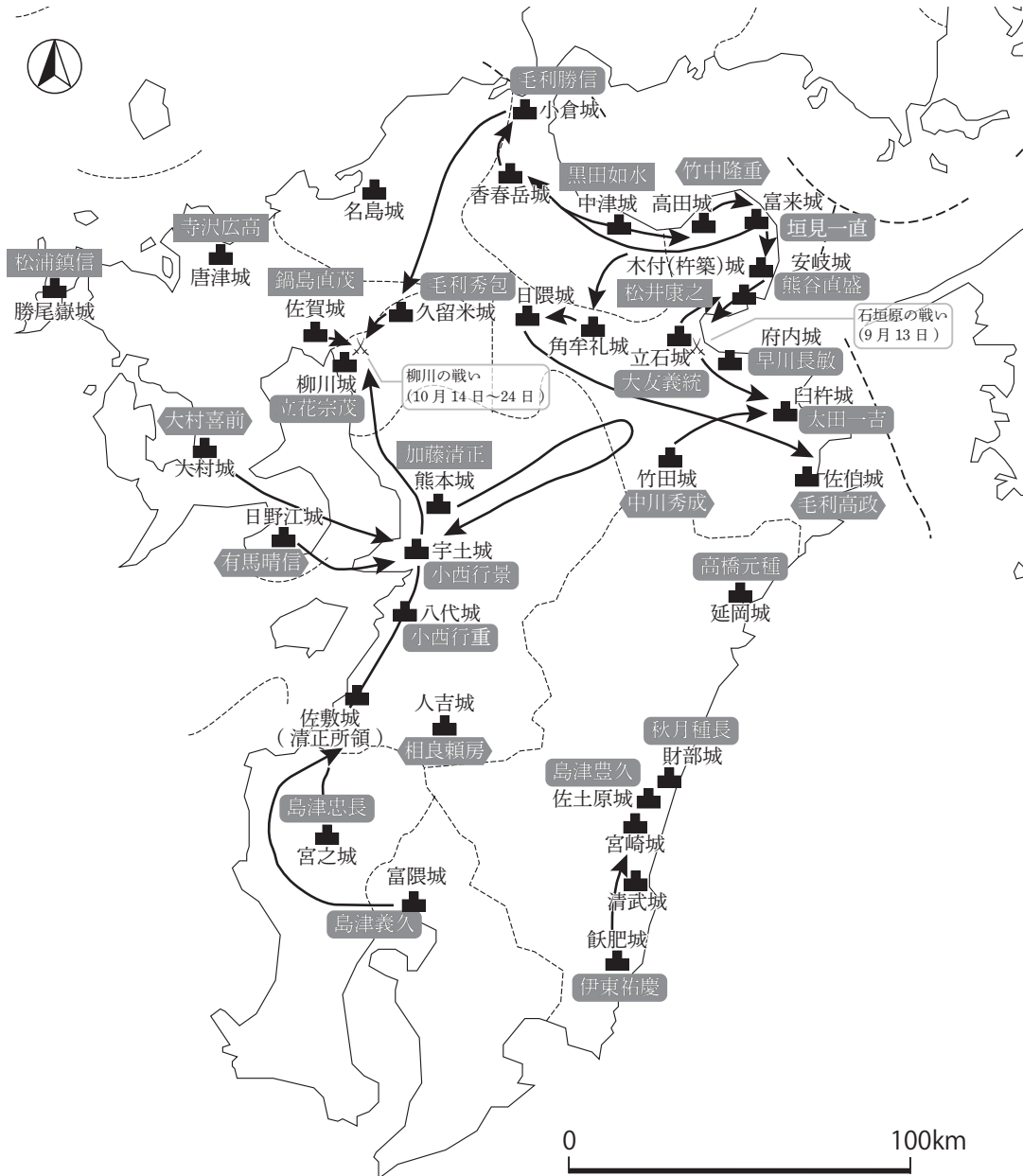
和暦	西暦	月日	九州情勢	国内情勢
慶長5	1600	8月1日		伏見城（山城国）が落城した。
		8月4日	細川氏領の豊後国木付（杵築）受け取りに向けて、太田一成が出立した。	
		8月5日		徳川家康が江戸城（武蔵国）に戻った。
		8月11日		石田三成・小西行長等が大垣城（美濃国）に入った。
		8月13日	太田一成が到着した。翌日、木付城（豊後国）明け渡しを勧告する書状を發した。	
		8月18日	小倉城（豊前国）城主の毛利吉成が、加藤清正の大坂方（西軍）への荷担を勧告するために下向した。	
		8月23日		福島正則ら家康方（東軍）により、大坂方（西軍）の織田秀信が守る岐阜城（美濃国）が落城した。
		8月25日	この頃、大友吉統勢が周防国上関まで下向した。	
		8月27日		家康方（東軍）方の伊勢安濃津城（伊勢国）が開城した。
		9月1日		徳川家康が江戸を出陣して西上を開始した。
		9月3日		大津城（近江国）城主の京極高次が大坂方（西軍）から離反して籠城した。 大谷吉継が関ヶ原南西の山中村に布陣した。
		9月7日		毛利元康を中心に立花宗茂、小早川秀包、筑紫広門ら九州方面の軍勢を中心に大津城（近江国）を包圍した（大津城の戦い）。
		9月8日	大友勢が豊後国安岐・富来間に着岸した。	
		9月9日	大友勢が豊後国立石村に布陣した。黒田如水が豊前國中津から出立した。	
		9月10日	大友勢が豊後国木付へ侵攻するが、撃退された。	
		9月12日	黒田勢が富来城（豊後国）を包圍した。	
		9月13日	大友勢と黒田・木付勢の戦闘が起こった（石垣原の戦い）。	
		9月14日		大垣城（美濃国）に駐留していた大坂方（西軍）は9月14日夜、大垣城に守備兵を配置して主力を関ヶ原へ移動した。
		9月15日	大友吉統が降伏した。加藤清正が豊後国の毛利氏領進攻に向け、肥後国熊本を出立した。	京極高次が籠城した大津城（近江国）が開城した（大坂方（西軍）の勝利）。 関ヶ原合戦によって両軍が衝突した（家康方（東軍）の勝利）。
		9月16日		大垣城（美濃国）に詰めていた相良頼房、秋月種長、高橋元種が水野勝成との交渉によって家康方（東軍）に寝返った。
9月17日	黒田勢が安岐城（豊後国）を包圍した。石垣原の戦いの結果をうけて、加藤勢は肥後方面へ転戦した。	佐和山城（近江国）が落城し、石田三成の父兄らが自害した。 大垣城（美濃国）に籠城していた熊谷直盛・垣見一直らを相良・高橋・秋月勢が殺害した。		

和暦	西暦	月日	九州情勢	国内情勢
慶長5	1600	9月19日		伊吹山中で小西行長が捕縛された。
		9月21日	加藤勢、小西氏居城の宇土城（肥後国）への攻撃を開始した。	近江国伊香郡古橋村で石田三成が捕縛された。
		9月23日		大垣城（美濃国）が開城した。
		9月24日	これ以前に、熊谷氏（安岐）・垣見氏（富来）は降伏した。島津・相良勢が加藤氏領佐敷城（肥後国）への攻撃を開始した。	
		9月26日	この頃、鍋島勝茂が帰国のために大坂を出立した。	
		9月28日	この頃、関ヶ原での戦闘の情報が九州まで到達した。豊後国にて毛利氏が降伏した。中川秀成が太田氏領豊後国臼杵へ向けて出陣した。	
		9月晦日	伊東勢が高橋氏領宮崎城（日向国）を攻撃した。翌日に落城した（宮崎城の戦い）。	
		10月1日	中川勢が臼杵を攻撃するが、太田勢に撃退された。	石田三成・小西行長・安国寺恵瓊が処刑された。
		10月2日	これ以前に、立花宗茂が筑後国柳川に帰国した。	
		10月3日	中川勢と太田勢が衝突し（佐賀関の戦い）、翌日まで戦いが続いた。これ以降、日向国で伊東勢と島津勢の戦闘が起こった。	
		10月11日	伊東祐兵が、大坂で死没した。 鍋島勝茂が肥前国佐賀に帰国した。	
		10月14日	鍋島勢が筑後国へ進軍し、黒田勢も同寺に進軍。久留米城（筑後国）が開城した。 宇土城（肥後国）が落城した。	
		10月15日	鍋島勢が立花氏領へ進軍した。	
		10月17日	小西領八代城（肥後国）が開城した。加藤清正が立花氏領への進軍に向けて、肥後国南関に着陣した。	
		10月20日	鍋島勢と立花勢の戦闘が起こった（江上合戦）。	
		10月22日	加藤勢が立花氏領柳川まで進軍した。	
		10月25日	立花氏と加藤・黒田氏が講和した。 柳川城（筑後国）が開城した。	
		11月12日	これ以前に、臼杵城（豊後国）が開城した。	
		11月22日	徳川家康が島津氏征討の延期を通知した。	
慶長6	1601	5月	伊東氏と島津氏が講和した。	
慶長7	1602	4月11日	徳川家康が島津氏領国安堵の起請文を發した。	
		12月	島津忠恒が上洛し、家康に拝謁した。	

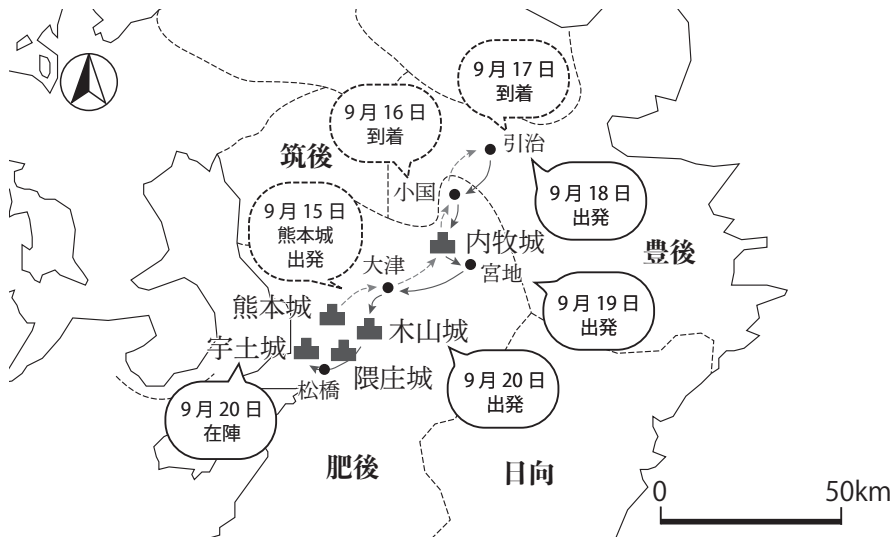
光成準治「九州の関ヶ原」戎光祥出版、2019（以下、光成準治〈2019〉と表記）等を参考に作成



関ヶ原合戦当時の九州諸大名配置・進軍図（光成準治 <2019> に加筆修正）



慶長5年（1600）加藤清正の進軍経路（宇土城攻撃まで）（光成準治 <2019> に加筆修正）

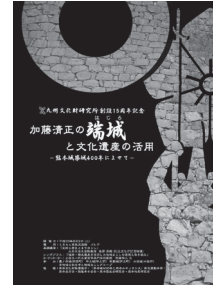


## 九州文化財研究所の本

### ○『加藤清正の端城と文化遺産の活用—熊本城築城 400 年によせて—』

九州文化財研究所創設 15 周年を記念して行われたシンポジウムの内容を著している。端城を中心とした内容で、九州大学大学院の服部英雄教授（元文化庁調査官）の講演をはじめとして、各地域の文化財担当者の文化財活用論は必見。七つの端城を中心とした地域文化財の紹介も好評。

A4 判 500 円（税込）



### ○『石器の実測をしよう！—はじめて実測を試みるあなたへ—』

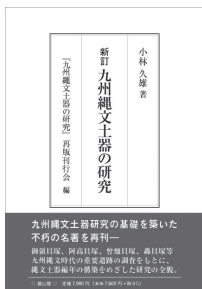
実測初心者にとって大きなハードルとなる難解な表現を、イラストをふんだんに取り入れてわかりやすく解説した視覚にうったえる教科書。初心者や実測をあきらめかけている人たちのための画期的な入門書である。

B5 判 58 ページ 1,500 円（税込）

### ○『新史料による天草・島原の乱—その時、徳川幕府軍はどう考えたか—』

「天草四郎をいけどりに」と指示した、幕府軍総司令官松平信綱の書状など、未公開一次史料を多数掲載。また、柳生宗矩・細川忠興をして「当代随一」と言わしめた実力を持っていた雲林院弥四郎（うじいやしろう）を、柳生宗矩の書状、塚原卜伝の伝授書をはじめとする一次史料で紹介する。今まで数百年間未公開であった史料により、伝説の兵法家たちの存在が明らかとなる。未公開資料 43 点。

A4 判 150 ページ 2,000 円（税込）



### ○『新訂 九州縄文土器の研究』小林久雄著 雄山閣

九州縄文土器の編年を確立した、小林久雄先生の偉業の集大成で、多くの研究者から再刊が望まれていました。『九州縄文土器の研究』から研究論文を中心に、九文研が事務局として再編集しました。

A5 判 351 ページ 7,890 円（税込）

### ○『土器の実測をしよう！—はじめて実測を試みるあなたへ—』雄山閣

國學院大学名誉教授小林達雄先生推薦！

三次元の遺物の特徴を理解し、二次元に描き表すという作業を伴う土器の実測には多くのつまづきが付き物である。石器実測本と同様に、多くのイラストを取り入れてわかりやすく解説しており、視覚にうったえながら実測初心者の疑問を解決に導く入門書である。

B5 判 81 ページ 2,000 円（税込）



## 九州文化財研究所のあゆみ

九州文化財研究所の歴史は、地域の文化財を守り、文化財に対し熱意をもって未来へ伝えていくという使命感とともに始まりました。



1993年（平成5年）の創設以来、地元熊本県を始め、九州・沖縄の各県だけでなく中国・四国・関東の地域の業務も行っております。今後も文化財に係るさまざまな分野に、誠心誠意を持って職員一同取り組む所存です。

年	出来事
1993（平成5）	有限会社 文化財環境整備研究所設立
1995（平成7）	測量業者の登録（登録番号第1-23532号）
1997（平成9）	株式会社 文化財環境整備研究所に組織変更設立
2002（平成14）	株式会社 九州文化財研究所に社名変更
2008（平成20）	創設15周年 講演会・シンポジウムの開催 （「加藤清正の端城と文化遺産の活用 -熊本城築城400年によせて-」）
2009（平成21）	城南町歴史民俗資料館（熊本市塚原歴史民俗資料館）にて新史料による資料展示会開催（新史料による天草・島原の乱 -その時、徳川幕府軍はどう考えたか-）
2010（平成22）	講演会・シンポジウム開催 （「ノーベル賞受賞者益川敏英博士と語りあう 自然をより深く学ぼう」）
2011（平成23）	保存処理事業開始
2013（平成25）	創設20周年 講演会・シンポジウムの開催 （「加藤清正の実像と英雄像の受容-生誕450周年記念によせて-」）
2019（平成31）	創設25周年講演会・シンポジウムの開催 （「知られざる熊本の明治維新-西南戦争前夜-」）
2020（令和2）	代表取締役社長に真崎伸一が就任
2023（令和5）	創設30周年講演会・シンポジウムの開催 （「関ヶ原合戦と九州の大名 どうする九州!？」）

### ○加藤清正の端城と文化遺産の活用

#### —熊本城築城400年によせて—

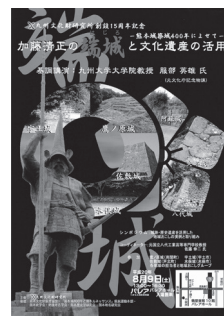
文化遺産の保存整備等に携わって15周年を迎えた九州文化財研究所は、城跡・地域遺産を活用した地域おこしの支援事業を開催しました。

各地域には、シンボリック役割を持ちながら、生活にとけこんでいる歴史遺産が数多くあります。その歴史遺産を再認識し、地域で活用していくために、様々な立場から、その地域における活動事例などを紹介するシンポジウムを計画しました。

シンポジウムの中心のテーマは「熊本城築城400年によせて加藤清正の端城と文化遺産の活用」としました。領内に7か所あった加藤清正の支城（端城）は、人々の思いを引きつけ、伝統行事などの文化遺産を活用する中核の一つになるからです。

講演会とシンポジウム

くまもと県民交流館パレアにて2008年8月開催



## ○新史料による天草・島原の乱

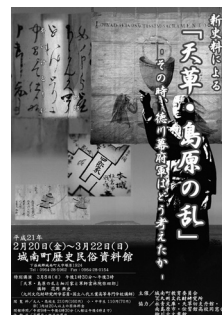
### —その時、徳川幕府軍はどう考えたか—

今からおよそ370年前に天草・島原の乱は終結しました。この一揆に関して、いままで豊富に残る史料により多くのことが語られています。しかし、幕府軍が、いつどの段階で指示を出していたかは明確ではありませんでした。「天草四郎をいけどりに」と指示した、幕府軍総司令官松平信綱の書状をはじめとする、今まで不明瞭であった幕府軍の動きを、未公開一次史料で明らかにすることを試みました。

また、細川軍の中にあつて、藩主忠利の側に付き添っていたひとりの軍師がいました。その名は、雲林院弥四郎（うじいやしろう）。当代随一といわれ、柳生宗矩や細川忠興を絶賛させた兵法者を、初公開しました。

企画展示会

城南町歴史民俗資料館にて2009年2月～3月開催



## ○ノーベル賞受賞者益川敏英博士と語りあう

### 「自然をより深く学ぼう」菊池川自然塾企画

青少年の未来に自然科学の灯をともし講演会を開催しました。

九州文化財研究所が事務局として活動している菊池川自然塾の趣旨に益川博士が賛同し、ノーベル賞受賞よりおよそ1年で、来熊が実現しました。高校生による司会のもと、益川博士の基調講演のほか、共催の熊本大学学長や熊本県知事、大阪大学名誉教授の講演やパネルディスカッション、来場した青少年と活発な質疑応答も行われました。

講演会とシンポジウム

ホテル熊本テルサにて2010年3月開催



## ○加藤清正の実像と英雄像の受容

### —生誕450周年記念によせて—

文化遺産の保存整備等に携わって20周年を迎えた九州文化財研究所は、20周年記念シンポジウム「加藤清正の実像と英雄像の受容～生誕450周年記念によせて～」を開催しました。

熊本になじみの深い加藤清正について、東京大学史料編纂所教授山本博文先生の基調講演のほか、加藤清正の実像について県内で活躍の有識者の方々に語り合っていました。

講演会とシンポジウム

くまもと県民交流館パレアにて2013年4月開催



## ○知られざる熊本の明治維新

### —西南戦争前夜—

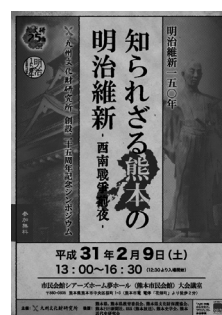
明治維新は「薩長土肥」が評価され、他藩の動向はあまり注目されることがありません。熊本も同様でしたが、明治時代までに熊本で形成された教育形態や行政システムなどには注目すべき事項が数多くあります。

幕末・明治維新时期から西南戦争に至るまでの熊本について、「政治」・「教育」・「民衆」の3つのテーマでもって、熊本の明治維新の状況を「薩長土肥」の一角を担った佐賀と比較しながら、近代化の様相を再評価しました。

大阪大学名誉教授猪飼隆明先生の基調講演の後、佐賀大学から青木歳幸先生をお招きし、熊本大学の三澤純先生・今村直樹先生とともに語り合っていました。

講演会とシンポジウム

市民会館シアーズホーム夢ホールにて2019年2月開催



\*過去のメセナ資料については弊社ホームページよりダウンロードできます。

## 九州文化財研究所の事業内容

九州文化財研究所は、考古学だけでなく地質学や歴史学などの専攻職員が、遺跡の形成過程から立地や歴史背景まで考えた調査に取り組みます。

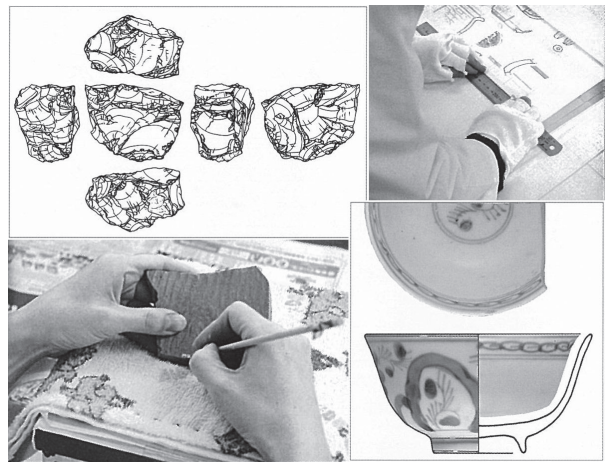
### 埋蔵文化財発掘調査

過去の人々が残した生活の痕跡を発掘し、出土品の収集、現場形状の測量、写真記録等を行います。



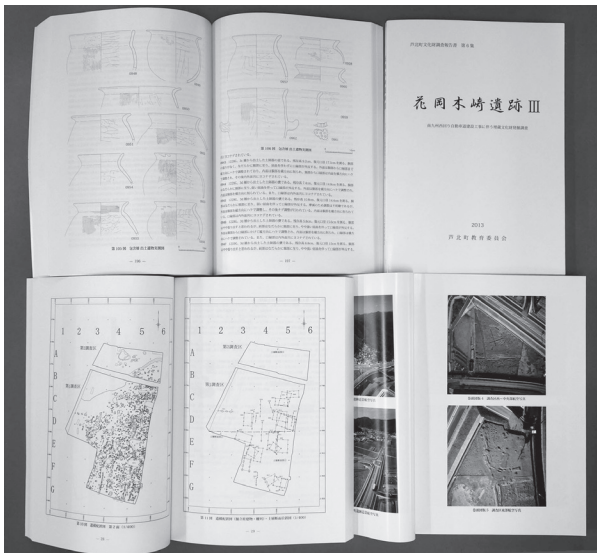
### 出土遺物整理

出土した遺物を洗浄・復元・分類・記録等を行い、当時の使用方法を探ります。



### 報告書作成

発掘調査や遺物整理から得た情報を基に、写真や図面を活用し、当時の状況や人々の生活様式などを皆様にお伝えする書物を作ります。



### 史跡整備・保存活用

史跡などを整備し、誰もが身近に感じていただける環境を整えます。保存活用計画をはじめとした各計画策定の補助も行います。



(国指定史跡芦北町佐敷城跡)

## 保存処理<新技術>

## Aquo-SiloxaneMethod ～アクオ・シロキサン法®～

処理時間が比較的短く、処理後の保管が容易な新技術による保存処理法を推進しています。

主に金属製品・木製品・石造物の保存修復を行っています。

従来の方法とは異なり、遺物そのものに含まれる「水」を利用します。遺物に負荷をかけず、処理後も遺物その物の質感を保持します。

また、処理後のメンテナンスも責任もって行います。



処理前



処理後

(熊本市二本木遺跡出土遺物)

## 理化学分析

博士号を取得し、国際学会等の経験豊富な調査員がさまざまな分析を行います。

例えば、出土遺物に対して肉眼的観察を基本とした石材分析を行い、鉱物学的見地から石材を特定します。

また、土層の堆積状況を観察し、地形と遺跡形成過程の一端の解明等も行います。



## 寺社・墓所調査

寺社に所蔵されている美術工芸品・古文書・民俗資料などの文化財を対象として、作成された時代の判定、銘文などの解読、画像の記録等を行います。また、墓域を含めた周辺地形のほか、墓所内に所在する墓碑、亀趺碑などの墓誌、石灯笼等の石造物調査と文献調査を行います。



## 史料解読・調査

大学等で講義経験豊富な専門の調査員により史料の解読を行います。記載内容の解明だけでなく、歴史的背景から文章の記載内容を検証します。



## 民俗・伝統工芸調査

伝統的工芸品などの民俗資料について、歴史的背景や作成手法などを、フィールドワークや文献などから調査します。これらの調査で得られた情報に基づいて、報告書や冊子等を作成します。



## 渡辺美術館所蔵「関ヶ原合戦図屏風」

無落款／両隻 172.0 × 756.0(cm)

紙本著色・六曲一双屏風／江戸時代

関ヶ原合戦当日の様子を戦場の南方面から描いています。

右隻一扇中段には徳川家康の本陣が、左隻五、六扇上段には石田三成の陣所があり、また、右隻五、六扇には開戦まもないころの東西両軍の激突の様子が、左隻一～三扇には東軍が押し気味に戦闘を展開している様子が描かれています。

旗指物や幕の描き方は単調ですが、人物・甲冑などは非常に丁寧に描かれており、陣形には一部脚色があるもののおおむね実際の位置に配置されています。また、戦闘場面に本多隊が島津隊を追い散らしている場面がありますが、これは合戦最後の敵中突破による島津隊の退却及び本多隊の追撃の様子を屏風絵の構成上脚色して描いたものと考えられます。

なお、関ヶ原合戦屏風絵は他に津軽本・井伊家本などが知られています。が、本屏風はそのどれとも異なる独自の様式を持っています。

(渡辺美術館ホームページ <<https://watart.jp/collection/>> 関ヶ原合戦図屏風 / > より引用)



渡辺美術館所蔵「関ヶ原合戦図屏風（左隻）」



渡辺美術館所蔵「関ヶ原合戦図屏風（右隻）」



公益財団法人 渡辺美術館

住所：〒 680-0003 鳥取県鳥取市覚寺 55 番地

ホームページ： <https://watart.jp>

X (Twitter)：公益財団法人 渡辺美術館 (公式) @info\_watart



九州文化財研究所創設 30 周年記念シンポジウム

「関ヶ原合戦と九州の大名 どうする九州!？」

発行日：2023 年 10 月 29 日

編集・発行：九州文化財研究所

〒 862-0954 熊本市中央区神水 1 丁目 32 番 19 号

TEL：096-381-2267 FAX：096-381-2299

E-mail：bunkazai@iwk.bbiq.jp

URL：http://kyubun.sakura.ne.jp/

印刷：株式会社 プリントパック

## 日時

令和5年10月29日(日)  
13:00~16:30(12:30より入場開始)

## 会場

くまもと県民交流館パレアパレアホール  
〒860-8554 熊本市中央区手取本町8番9号

## 主催

九州文化財研究所

## 後援

熊本県、熊本県教育委員会、熊本県文化財保護協会、熊本日日新聞社  
RKK(熊本放送)、熊本史学会、熊本歴史学研究会

## 渡辺美術館所蔵「関ヶ原合戦図屏風(左隻)」

